

令和 2 年度  
運営諮詢會議報告書

(ウェブサイト公開用抜粋版)

令和 3 年 6 月



## まえがき

熊本高等専門学校におきまして毎年開催しております運営諮問会議をコロナ禍の中で今年度はどのようなかたちで開催すべきか検討いたしましたが、本校にとりまして、外部の有識者の皆様から貴重なご意見を直接うけたまわる大変重要な機会でございますので、可能であれば例年のとおり対面形式で実施したいと考えました。感染状況にも注意しながら、簡素化して従来2つ用意しておりますテーマを1つに厳選し、本校からの出席者は最小限に抑えて他の教職員はリモートにて参加するなどの対応をとって開催させて頂きました。

その今回のテーマは、熊本キャンパスに2021年6月完成予定の国際寮を紹介して、その活用などについてご意見をいただくことといたしました。国際寮は、独立行政法人国立高等専門学校機構が、国立高専全国51校のうち、本校を含む17高専に新設いたします。いわゆるシェアハウス型で外国人留学生と日本人学生の混住を通じてキャンパス内で国際交流や異文化相互理解を多様な形で日常的に展開でき、国際的な視野を持つ実践的で創造性のある技術者の育成をはじめとして、熊本高専全体の国際化の推進に大きく寄与することが期待されます。

本会議では、テーマを1つに限ったおかげでじっくりとご意見をお聞きでき、国際化の影響の広さ大きさを改めて認識することとなりました。皆さまから頂きましたご提言につきましては、学内において十分に検討させていただき、自己点検も踏まえながら、対応してまいります。年度が改まった後も、コロナ禍終息の見通しが得られないなかで外国からの留学生を受け入れる予定がたっておりませんが、次回の本会議におきまして国際寮に関する報告をさせていただきます。

その他、今年度は、高専機構の施策としまして、Society5.0時代の未来技術の中核となる人材の育成を目的とする「Gear5.0 (Gears of Education and Advanced Resources) 未来技術の社会実装教育の高度化」事業が開始され、国立高専51校のうち、本校と鈴鹿高専の2校が採択されました。本校におきましては、「持続可能な地域医療・福祉を支えるeAT-HUB構想とAT(アシスティブ・テクノロジー)技術者育成による共生社会の実現」をテーマとして、函館、長野、富山、徳山の4高専の協力の下、医療福祉機関を下支えする全国KOSEN-ATネットワーク基盤を構築し、障害者就労、医療リハビリ、健康寿命延伸等を支援する多品種・少量・カスタム型AT機器の社会実装・高度化研究、社会需要創造を支援するeAT(extented-AT(次世代AT))-HUB整備とAT技術者育成を目指し、その成果を全国展開すべく計画しております。

また、今年度、経済産業省の戦略的基盤技術高度化支援事業（サポイン事業）の採択も受けまして、公益財団法人くまもと産業支援財団、地元企業等との連携を図りながら、中小企業によるものづくり基盤技術の向上を進めております。そのほか、三菱みらい育成財団から両キャンパスそれぞれに教育改善・質向上に関して助成を受けるなど、種々の活動を展開しております。

本校の教育・研究・地域貢献・国際交流などの様々な活動におきましては、委員の皆様方からのご意見やご指摘等をいただることが重要であります。今回、運営諮問会議にご参加いただき、貴重なご意見やご提言を頂きました委員の皆様に篤く感謝申し上げますとともに、今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

## 目 次

### まえがき

1	熊本高等専門学校運営諮問会議委員名簿	1
2	熊本高等専門学校運営諮問会議規則	2
3	日程等	4
4	出席者名簿	5
5	前年度の提言等に対する改善に向けた対応	7
6	議事記録	13
7	今年度の会議における提言事項	41
8	説明資料 ・国際寮の新設と今後の運用について	42

## 1. 熊本高等専門学校運営諮問会議委員名簿

氏 名	現 職
連 川 貞 弘	国立大学法人熊本大学工学部長
荒 木 義 行	合志市長
中 村 博 生	八代市長
小 牧 裕 明	熊本県商工観光労働部新産業振興局長
徳 永 光 博	熊本県中学校長会長
金 森 秀 一	熊本県工業連合会長
平 田 正治郎	平田機工株式会社取締役執行役員
櫻 井 一 郎	櫻井精技株式会社代表取締役社長
宮 下 和 也	熊本日日新聞社編集委員室長
原 田 茂	熊本高等専門学校熊本キャンパス同窓会長
亀 田 英 雄	熊本高等専門学校八代キャンパス同窓会長

(敬称略)

## 2. 熊本高等専門学校運営諮問会議規則

### 熊本高等専門学校運営諮問会議規則

平成23年5月17日制定  
平成28年3月18日一部改正  
平成31年1月22日一部改正

#### (趣旨)

第1条 この規則は、熊本高等専門学校内部組織規則第11条第3項の規定に基づき、運営諮問会議（以下「諮問会議」という。）に関し必要な事項を定めるものとする。

#### (目的)

第2条 諮問会議は、本校の教育研究活動等の状況について評価及び助言等の提言を行い、本校での自己点検・評価に関する活動を支援することを目的とする。

#### (任務)

第3条 諮問会議は、次に掲げる事項について、校長の諮問に応じて評価等を実施するものとする。

- (1) 本校の教育研究上の目的を達成するための基本的な計画に関する事項
- (2) 本校の教育研究活動等の状況について本校が行う自己点検・評価に関する事項
- (3) その他本校の運営に関する事項

#### (組織)

第4条 諮問会議は、本校の職員以外の者で次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 大学等高等教育機関の関係者
- (2) 本校の所在する地方自治体の関係者
- (3) 本校の所在する地域の教育関係者
- (4) 本校の所在する産業・経済界の関係者
- (5) 報道機関の有識者
- (6) 本校を卒業又は修了した者
- (7) その他高等専門学校に関して広くかつ高い識見を有する者

#### (委嘱)

第5条 委員は、校長が委嘱する。

#### (会長)

第6条 諮問会議に、会長を置き、校長が指名する者をもって充てる。

- 2 会長は、諮問会議を主宰する。
- 3 会長に事故があるときは、あらかじめ校長が指名する委員がその職務を代行する。

#### (任期)

第7条 委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、欠員を生じた場合の後任者の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

#### (委員以外の者の出席)

第8条 会長が必要であると認めた場合は、委員以外の者の出席を求め、意見又は説明を聞くことができる。

(開催)

第9条 諮問会議の開催は、原則として年1回とし、開催場所は、熊本キャンパスと八代キャンパスにおいて交互に開催する。

(事務)

第10条 諮問会議に関する事務は、総務課において処理する。

(雑則)

第11条 この規則に定めるもののほか、諮問会議の運営等に関し必要な事項は、別に定める。

#### 附 則

1 この規則は、平成23年5月17日から施行する。

2 この規則施行後最初に委嘱される第4条の委員の任期は、第6条の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。

#### 附 則

この規則は、平成28年4月1日から施行する。

#### 附 則

この規則は、平成31年4月1日から施行する。

### 3. 日 程 等

【日 時】 令和2年10月29日（木）

【会 場】 熊本高等専門学校 熊本キャンパス（ICTホール）

【次 第】

- 1 開会（校長挨拶）
- 2 日程説明、出席者の紹介等
- 3 令和元年度提言に対する改善に向けた対応について
- 4 話題提供  
「国際寮の新設と今後の運用について」
- 5 意見交換・まとめ
- 6 閉会（校長謝辞）

## 4. 出席者名簿

### 【運営諮問会議委員】

連 川 貞 弘	国立大学法人熊本大学工学部長
濱 田 善 也	合志市 副市長 ※荒木義行委員（合志市長）の代理出席
山 本 哲 也	八代市経済文化交流部長 ※中村博生委員（八代市長）の代理出席
小 牧 裕 明	熊本県商工観光労働部新産業振興局長
徳 永 光 博	熊本県中学校長会会長
金 森 秀 一	熊本県工業連合会会長
田 口 智 弘	櫻井精機株式会社管理グループ次長 ※櫻井一郎委員（代表取締役社長）の代理出席
平 田 正治郎	平田機工株式会社取締役執行役員
宮 下 和 也	熊本日日新聞社編集委員室長
原 田 茂	熊本高等専門学校熊本キャンパス同窓会長
亀 田 英 雄	熊本高等専門学校八代キャンパス同窓会長

(敬称略)

### 【学校関係者】

荒 木 啓二郎	(校長)
大 塚 弘 文	(副校長・熊本)
田 中 穎 一	(副校長・八代)
清 田 公 保	(教務主事・熊本)
小 林 幸 人	(教務主事・八代)
光 永 武 志	(学生主事・熊本)
村 山 浩 一	(学生主事・八代)
島 川 学	(寮務主事・熊本)
上 土 井 幸 喜	(寮務主事・八代)
小 山 善 文	(研究主事・熊本)
湯 治 準一郎	(研究主事・八代)
小 田 明 範	(専攻科長)
柴 里 弘 輝	(副専攻科長)
大 石 信 弘	(情報通信エレクトロニクス工学科長)
藤 本 信 一 郎	(制御情報システム工学科長)
小 松 一 男	(人間情報システム工学科長)
古 嶋 薫	(機械知能システム工学科長)
森 山 学	(建築社会デザイン工学科長)
弓 原 多 代	(生物化学システム工学科長)

伊 藤 利 明 (リベラルアーツ系長)  
時 松 雅 史 (リベラルアーツ副系長)  
嶋 田 泰 幸 (グローバルリーダーシップ育成センター長)  
宇ノ木 寛 文 (グローバルリーダーシップ育成副センター長)  
藤 本 洋 一 (情報セキュリティセンター長)  
藤 井 慶 (情報セキュリティ副センター長)  
小田川 裕 之 (地域協働プロジェクトセンター長)  
田 中 裕 一 (地域協働プロジェクト副センター長)  
大 島 賢 治 (FD推進室長)  
永 田 正 伸 (FD推進副室長)  
五十川 読 (自己点検評価委員長)  
永 野 拓 也 (自己点検評価副委員長)  
千 葉 直 樹 (事務部長)  
尾 方 富美代 (総務課長)  
小 野 亮 一 (管理課長)  
坂 本 誠 司 (学生課長)  
永 長 一 平 (学務課長)

# 令和元年度提言に対する改善に向けた対応について

## I 改善に向けた対応

令和元年度提言に対する改善に向けた対応は、前回会議で各委員からいただいた貴重なご意見を、運営諮問会議会長の下で提言としてとりまとめいただき、その提言に対する改善に向けた対応について、本校で検討した結果をとりまとめたものです。

この改善に向けた対応は、企画運営会議に報告し、本校の課題として共通認識を図り、今後も改善に向け、組織的・継続的に取り組むこととしています。

## II 前回会議における提言事項

前回受けた2項目の提言事項について、それぞれ以下のとおり整理しています。

### 【提言事項】

運営諮問会議会長においてとりまとめいただいた提言です。

### 【提言に関するご意見抜粋】

各委員からいただいた上記に関連するご意見です。

### 【対応区分】

本校で提言の現状確認を行い、対応の進捗状況を下記A～Dの4区分で分類したものです。

### 【提言に対する点検及び改善に向けた具体的対応】

提言に対する対応状況及び具体的な改善方策を取りまとめたものです。

## III 改善状況の区分

改善に向けた対応は、既に改善が実施されているものから改善には今後十分な検討を要するものまで、以下の4つの区分に分類しています。

### ◇対応区分

A	改善に向けた対応を、実施しているもの
B	改善に向けた対応を、直ちに行う必要があるもの
C	改善に向けた対応を、将来的に行う必要があるもの
D	改善に向けた対応には、十分な検討が必要なもの

◆「新カリキュラムの目標と教育の質保証について」に関する提言（1-1）

提言等事項	有意義な取り組みではあるが、内容が盛りだくさん過ぎる印象で、学生側から見たときに、逆に負担になるのではないかという点が懸念される。学生にわかりやすく、趣旨を含め伝えることが求められる。また、ある意味企業は一つの専門分野に突出した人材を採用したいと考えており、ミスマッチが生じる可能性もあると思う。
提言に関するご意見等抜粋	<p>◇宇佐川議長 ・高専で習ったことで一生涯、生きていくには今は時代が動き過ぎており、それに耐えるために、例えば電気を習って電気しかしない高専生であれば、どこかで手を変えなければならなくなつた時に困らないか。そのためには、全体をもう少し俯瞰的に見たりするという方向性を入れることによって、次の40年間を楽しみ、この激動社会を生きていく人になってほしいという思いで、カリキュラム構成をされたのではないかと考える。</p> <p>◇田口委員 ・リベラルアーツ教育は非常に良いと思うが、それが入ってきて学生としては具体的にどういう授業をしていただけるのか、昔はこうだったがリベラルアーツのこういうのに沿った内容になると、カリキュラムが、教え方がこうなるとか、これが複合的にこうなるというような点について、理解がしづらい。</p>
対応区分	A:「改善に向けた対応を、実施しているもの」
判断理由	リベラルアーツ系科目については、一般科目、専門科目での学修成果をつなぐ「ハブ」としての役割を担うものであることを改めて明確にしたうえで、令和元年度開始の「リベラルアーツ入門」、令和2年度開始の「リベラルアーツ実践Ⅰ」の授業を設計、実施している。また、リベラルアーツ系教育については、様々な科目を通した学習体験、学習内容を有機的に接続する「ハブ」としての役割を担う視点から令和元年度の授業実践を確認、令和2年度の授業計画を立案した。 令和元年度実施の「リベラルアーツ入門」については、実践成果を検証、教育論文としてまとめ「工学教育」誌に投稿、掲載され、4、5年生の専門総合力育成との接続については、より具体的な教育内容、方法を試行、検証するため、「三菱みらい育成財団助成」応募、採択された。 以上のことから、改善に向けた対応を実施していると判断する。

（提言に対する点検及び改善に向けた具体的対応状況）

①	<p>&lt;提言前&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新カリキュラムの設計にあたり「リベラルアーツ教育を基盤とした専門総合力育成」を中心課題としていたが、その具体的な内容、方法について明確にする必要があった。</li> </ul>
	<p>&lt;提言後&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・分野横断的能力育成を目的とするリベラルアーツ系科目について、一般科目、専門科目での学修成果をつなぐ「ハブ」としての役割を担うものであることを改めて明確にし、令和元年度開始の「リベラルアーツ入門」、令和2年度開始の「リベラルアーツ実践Ⅰ」の授業設計をおこない、実施している。</li> </ul>
②	<p>&lt;提言前&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・リベラルアーツ教育が、多種多様な学習内容を含むことにより、専門教育が疎かになるとの誤解、あるいは単なる教養教育となってしまうとの懸念があった。</li> </ul>
	<p>&lt;提言後&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・上記のようにリベラルアーツ系教育は、様々な科目を通した学習体験、学習内容を有機的に接続する「ハブ」としての役割を担うものであるという視点から令和元年度の授業実践を確認し、令和2年度の授業計画を立案した。</li> </ul>
③	<p>&lt;提言前&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・上記のようにリベラルアーツ教育に関する共通理解が十分には形成されておらず、単なる教養的知識の習得と誤解され、専門教育との関連性について認識が得られていない状況であった。</li> </ul>
	<p>&lt;提言後&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・令和元年度実施の「リベラルアーツ入門」について、その実践成果を検証し、教育論文としてまとめ「工学教育」誌に投稿し、掲載された。また、4、5年生の専門総合力育成との接続について、より具体的な教育内容、方法を試行、検証するため、「三菱みらい育成財団助成」応募し、採択された。</li> </ul>

◆「新カリキュラムの目標と教育の質保証について」に関する提言（1-2）

提言等事項	毎回の講義時間単位ではなく、5時間なり10時間なり自分たちで授業の計画も立てていくような、そういう学びに向かう力、自分で追及していくことを含めた主体性につながる授業を推進すると、学生はもっと育っていくのではないか。
提言に関するご意見等抜粋	◇竹下委員 ・具体的に授業はどうやっていくかとなると、やっぱり「なぜ」とか「どうして」とか、皆で話し合いをしていく中で、自然にコミュニケーションもチームワークもできてくるし、意見が違うときには合意形成も必要となってくる。ダイナミックな授業の組み方、授業でこういうことをやっているということを、学校説明会等で宣伝をされたらしいのではないかと思う。
対応区分	A:「改善に向けた対応を、実施しているもの」
判断理由	「リベラルアーツ入門」という新規科目において、分野横断的能力の育成に取り組み、専門分野を超えた「分野横断的能力」を基本スキルと考え、低学年の共通科目に「リベラルアーツ入門」、「リベラルアーツ実践Ⅰ」などの新カリキュラムの科目を導入することにより、チーム力やコミュニケーション力といった分野横断的能力涵養のための教育体系を実装することが出来た。また、新カリキュラムではリベラルアーツ教育を強化するものであり、主体性を含む分野横断的能力の育成を主たる目的としており、共通必修科目である「リベラルアーツ入門」は、担当者間で適宜情報を共有しながら実施、主体的学習に関しては、学習内容、学修の目的などを学生に振り返らせるなどの指導をおこなっている。更に、「学ぶ目的」を考えさせるコンテンツなどを充実させ、「リベラルアーツ実践Ⅰ」を令和2年度から実施し、成果の検証等については、今年度中におこなう予定である。 自学自習支援の体制強化については、新型コロナウイルス感染拡大に伴う遠隔授業の実施によって、LMS等を利用した授業の実施と併せ、学生の主体的学習の環境が図らずも促進されており、この措置による影響、効果については今年度中に検証をおこなう。また、令和元年度入学生から、時間割上に「自学自習」(目的別学習)を開設し、主体的な学修を促進する試みをおこなっており、自学自習促進の体制を再構築し、その効果を検証する。 以上のことから、改善に向けた対応を実施していると判断する。

(提言に対する点検及び改善に向けた具体的対応状況)

①	<提言前> ・旧カリキュラムは、両キャンパスで独立した共通科目群の構成であった。
	<提言後> ・令和元年度の1年生より、新カリキュラムが両キャンパスで導入され、現在、2年生まで年次進行している。今回の新カリキュラムから、両キャンパスで低学年は共通のカリキュラムとなり、「リベラルアーツ入門」という新規科目において、分野横断的能力の育成に取り組んでいる。また、専門分野を超えた「分野横断的能力」を基本スキルと考え、低学年の共通科目に「リベラルアーツ入門」、「リベラルアーツ実践Ⅰ」などの新カリキュラムの科目を導入することにより、提言でご指摘のあったチーム力やコミュニケーション力といった涵養の教育体系を実装することが出来た。
②	<提言前> ・低学年を主に対象とする共通教育科目については、平成30年度まではコアの部分は共通していたが、それぞれのキャンパスで異なるカリキュラムであり、主体性等の育成に関してもそれぞれのキャンパスに委ねられているものであった。
	<提言後> ・令和元年度より新カリキュラムが開始され、両キャンパス共通のリベラルアーツ系カリキュラムが実施されている。このカリキュラムではリベラルアーツ教育を強化するものであり、主体性を含む分野横断的能力の育成を主たる目的としている。
③	<提言前> ・平成30年度までは、それぞれのキャンパスで主体性、自律性などの教育をおこなっていた。
	<提言後> ・共通必修科目である「リベラルアーツ入門」は、両キャンパスの担当者で学習目標、実施内容等をすり合わせ、適宜情報を共有しながら実施した。主体的学習に関しては、学習内容、学修の目的などを学生に振り返らせるなどの指導をおこない、実施した成果について担当者で検証し、「工学教育」誌に実践事例報告として投稿、掲載された。また、「学ぶ目的」を考えさせるコンテンツなどを充実させて令和2年度の「リベラルアーツ入門」を実施している。
④	<提言前> ・上記の通り「リベラルアーツ入門」(1年生共通必修科目)を企画、実施している。
	<提言後> ・令和元年度の「リベラルアーツ入門」に加え、主体性を含む分野横断的能力の育成を目的とするリベラルアーツ系科目である「リベラルアーツ実践Ⅰ」(2年生共通必修科目)について、両キャンパス担当者間で、情報共有を図りながら授業計画を立て、令和2年度から実施している。成果の検証等については、今年度中におこなう予定である。
⑤	<提言前> ・LMSとして機構共通のBlackboardに加え、本校独自のWeb Classを整備し、学生の自学自習を支援する体制を構築していた。ただし、その運用に関しては、授業担当教員に委ねられており、学校全体としての自学自習支援体制の強化が課題となっていた。
	<提言後> ・八代キャンパスでは、令和4年度からBYODに移行する計画を進めており、自学自習促進に向けた体制強化を図り、令和元年度中に教員会等で、方針等を示すとともに、各家庭にPC等の購入依頼の通知をおこなっていた。令和2年度の新型コロナウイルス感染拡大に伴う遠隔授業の実施によって、LMS等を利用した授業の実施と併せ、学生の主体的学習の環境が、図らずも促進されている。この措置による影響、効果については今年度中に検証をおこなう。
⑥	<提言前> ・学生の習熟度に合わせた補講などを実施することで、授業外の学修支援をおこなっていた。ただし、成績不振の学生に対する学修支援の意味合いが強く、学生の個々の特性に応じた自学自習支援の体制強化が課題となっていた。
	<提言後> ・令和元年度入学生から、時間割上に「自学自習」(目的別学習)を開設し、各自の特性、ニーズに応じた自学自習を促進する試みをおこなっている。令和元年度後期には、各自の学習計画と点検をおこなわせ、主体的な学修を促進する試みをおこなっている。ただし、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、令和2年度については実施できていないため、今後改めて自学自習促進の体制を再構築し、その効果を検証する。

◆「本校のグローバルエンジニア育成の取り組みについて」に関する提言（2-1）

提言等事項	日本人の感性を持って海外で活躍しているグローバルエンジニアと呼ばれる方々を招聘し、学生に対して生活習慣や文化の違い、将来に対する考え方の違い等まで含めた英語教育・外国語教育等、実践的なエンジニア・技術者になるために必要なことを学ばせたらどうか。
提言に関するご意見等抜粋	<p>◇濱田委員 ・グローバル教育に関しては、早くから自分の進む方向性を考えられるよう、小中学校からの教育、いわゆるグローバル小中学生を育成しておく必要があるのではないかと思う。また、企業ではグローバルエンジニアと呼ばれる方が活躍しているが、そういう日本人の感性を持って海外で活躍している方をお呼びして、学生に対して生活習慣や文化の違い、将来に対する考え方の違い等まで含めた英語教育・外国語教育をお願いし、実践的なエンジニア・技術者になるためにはこれが必要ですということも、熊本ならできるのではないか。</p> <p>◇平田委員 ・一番大事なのはやはり技術力だと思う。技術力があつてコミュニケーション能力、コミュニケーション能力を補完するのが語学力である。技術者というのは、「技術で会話する」とよく言われるため、技術力がないとどうしようもない。その技術力があつてのグローバルエンジニア、コミュニケーション能力、英語力であるというのを絶対忘れないで欲しいと思う。</p>
対応区分	A:「改善に向けた対応を、実施しているもの」
判断理由	<p>海外で活躍しているグローバルエンジニアと呼ばれる方々を招聘しての教育は、来年度以降の授業計画を作成するチームに検討を依頼する予定である。令和元年度はOBをお招きし、全1年生を対象に講演会を実施し、同様の講演会は今後も実施していく予定である。</p> <p>今後は語学学習の重要性に触れる内容の充実、「技術あつてのコミュニケーション」について、グローバルコンテクストにおける技術交流にまで内容を伸ばし、対象を他の学年にも波及されることも含め、カリキュラムの中でもグローバルエンジニア育成の要素を取り入れていくことを検討している。また、令和元年度は交流協定締結校である香港IVEのSTEMセンターから講師を招き、STEM Activityの講座を実施し、リベラルアーツ科目における実践は令和2年度から行う予定である。更に、「マイクロインサーション」の考え方を取り入れ、グローバルコンテクストにおける技術貢献につながる話題を「多くの科目で少しづつ」、随時取り入れることをカリキュラム立案時の基本的な考え方としている。</p> <p>以上のことから、改善に向けた対応を実施していると判断する。</p>

(提言に対する点検及び改善に向けた具体的な対応状況)

①	<p>&lt;提言前&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2年生あるいは3年生を主な対象として、希望者の中から選抜して台湾研修に毎年秋(9月)と春(3月)の2回実施している。そのプログラムの中で台湾平田機工の社員の皆さんと英語によるディスカッション及び本校紹介を行うなどして、低学年のうちに海外で働く日本人及び現地のエンジニアの皆さんとの交流を通じて、国際理解やグローバルエンジニアとして大切な感性を高めるよう教育している。</li> </ul> <p>&lt;提言後&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・海外で活躍しているグローバルエンジニアと呼ばれる方々を招聘しての教育は、現行の英語の授業のなかでは盛り込みにくいが、現在進行中の新カリキュラムのリベラルアーツ実践の授業に相応しい内容なので、文系科目のみならず理数系科目においても来年度以降の授業計画をするチームに検討をお願いする予定である。</li> </ul>
②	<p>&lt;提言前&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本校では、学生が将来エンジニアとしてグローバルに活躍するために、在学時にできるだけ多くのグローバルな経験を始めるができるように、在学中に長期の海外留学を経験したOB・OG、或いは卒業後グローバルコンテクストでエンジニアリングに携わった経験のあるOB・OGを招いて、1年生を対象に啓蒙的な講演会を実施してきた。</li> </ul> <p>講演会聴講前は、海外に興味のある学生は一定数見られるものの、グローバルコンテクストでエンジニアリングに携わることを意識していた学生はほとんどおらず、OB・OGの話を聞いた結果、多くの学生が自らの問題として将来の姿を意識することができたことが事後のアンケートから読み取ることができている。</p> <p>&lt;提言後&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・令和元年度は両キャンパスで1回ずつ、合計3名のOBをお招きし、全1年生を対象に講演会を実施した。同様の講演会は今後も実施したい。これまで、啓発が目的であったために主に異文化理解を入り口として興味を広げることに注力してきたが、今後は提言にもあるように、語学学習の重要性に触れる内容も充実していかたい。また、こちらも提言にあった「技術あつてのコミュニケーション」について、内容を異文化理解にとどまらないグローバルコンテクストにおける技術交流にまで内容を伸ばし、更に対象を他の学年にも波及されることも検討したい。</li> </ul>
③	<p>&lt;提言前&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いくつかの科目で「グローバルコンテクストにおける技術貢献」に関するトピックを授業中の話題に取り入れている。</li> </ul> <p>&lt;提言後&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本校では学内の様々な個所でのグローバル化が進展するよう整備を進めている最中であるが、今後は特別活動・課外活動だけでなく、カリキュラムの中でもグローバルエンジニア育成の要素を取り入れていくことを検討している。</li> </ul> <p>一例として、共通教育科のリベラルアーツ入門～実践、或いは理数系科目において、ネイティブスピーカーにより、CLIL(内容言語統合型学習)の考え方を取り入れた講座を複数実施し、たとえばSDGsやSTEMに関する授業を英語で実践し、参加することによりグローバルエンジニアとして必要な知識や能力を習得しながら英語のスキルも高めていく試みを実施する予定にしている。令和元年度は交流協定締結校である香港IVEのSTEMセンターから講師を招き、主に低学年を対象に両キャンパスでSTEM Activityの講座を実施した。また、リベラルアーツ科目における実践は令和2年度から行う予定である。</p> <p>更に、特定の科目でのみグローバルエンジニア育成を試みるのではなく、「マイクロインサーション」の考え方を取り入れ、グローバルコンテクストにおける技術貢献につながる話題を「多くの科目で少しづつ」、随時取り入れることをカリキュラム立案時の基本的な考え方としても考えている。</p>

◆「本校のグローバルエンジニア育成の取り組みについて」に関する提言（2-2）

提言等事項	高専の先生方が海外の方々との共同研究をさらに推進できるような環境を整備し、グローバルエンジニア育成と絡めて、企業に海外からのインターンシップが入るような環境になるのが望ましいと思う。
提言に関するご意見等抜粋	<p>◇山本委員        ・八代市及び県南地域において、技能実習生等の外国人が地域に溶け込んでいるか、うまく連携して何か新しい価値を生み出しているかという点に関しては、まだまだ発展途上であると言える。高専のグローバルエンジニア育成との関わりについて理想像を考えると、高専の先生方が、海外の方々との共同研究をさらに推進できるような環境になって、それでアジア、欧米から高専の方々と共同研究のためにいろんな方、学生さんが来るとか、高専を通じて企業に海外からのインターンシップが入るような環境になるのが望ましいだろうと思う。それで、われわれとしても高専の取り組みに歩調を合わせて受入環境の整備を進めなければと思っている。</p> <p>◇三輪委員        ・教育については、小中学校のうちに英語のレベルをある程度上げておく必要があり、幼い頃からの英語教育が非常に重要と感じている。また、多数の海外の方に来ていただくため、空港周辺の開発に取り組んでいきたい。そこにこれから中国や台湾、東南アジアの需要も望めるような、医療や介護、福祉等に絡むようなIoT産業の誘致等、多くの外国人に来ていただくようなインフラ整備をする必要があると思っている。地元の企業も行政も、インターンシップの対象というか一緒に協働するというか、共に育てる相方として考えることができるのではないか。</p>
対応区分	A:「改善に向けた対応を、実施しているもの」
判断理由	グローバルエンジニア育成を強化するために、現在、マレーシアの技術者教育機関と学生および教職員の交流活動について意見交換を行っている。また、熊本キャンパスでは国際寮の新設、八代キャンパスでは学生寮の一部を国際寮化する改修が実現予定であり、海外から多くの学生や教職員を招聘することが可能となり、地元企業へ留学生のインターンシップの受入れを依頼する取り組みも実施していくこととした。具体的には、熊本高専地域連携振興会会員企業に留学生の就職受け入れを検討して頂いた。更に今年度は、長岡技科大の留学生をインターンシップで本校に受け入れる検討をしており、周辺企業へのインターンシップも検討中である。 以上のことから、改善に向けた対応を実施していると判断する。

(提言に対する点検及び改善に向けた具体的な対応状況)

①	<p>&lt;提言前&gt;</p> <p>・本校から独立行政法人国立高等専門学校機構在外研究員を毎年度1名派遣し、その教職員が主に海外との共同研究を実施している。また、グローバルリーダーシップ育成センター(GLセンター)が中心となって、毎年度シンガポールのポリテクニックや香港専業教育学院(IVE)から短期留学生を受け入れ、交流活動を実施している。更に本校の留学生にも、日本人学生同様、様々なインターンシップの情報を提供している。</p>
	<p>&lt;提言後&gt;</p> <p>・今回の提言を受け、在外研究員経験者以外の教職員にも共同研究の機会を広げ、グローバルエンジニア育成を強化するために、現在、マレーシアの5つの技術者教育機関と学生および教職員の交流活動について意見交換を行っている。また、熊本キャンパスでは国際寮の新設、八代キャンパスでは学生寮の一部を国際寮化する改修が実現予定であり、これまでより海外から多くの学生や教職員を招聘することが可能となる。上記の短期留学生受入れは継続して取り組みながら、併せて地元企業へ留学生のインターンシップの受入れを依頼する取り組みも実施していくこととした。具体的には、熊本高専地域連携振興会会員企業に留学生の就職受け入れを検討して頂いた。(ビザの関係で帰国)。更に今年度は、長岡技科大の留学生をインターンシップで本校に受け入れる検討をしており、周辺企業へのインターンシップも検討中である。</p>

## 令和2年度 熊本高等専門学校運営諮問会議

【司会】本日は、お忙しい中ご出席をたまわりまして誠にありがとうございます。定刻となりましたので、ただいまより令和2年度熊本高等専門学校運営諮問会議を開催いたします。開会にあたりまして、本校荒木校長よりごあいさつ申し上げます。

【校長】校長の荒木でございます。本日は、熊本高等専門学校の運営諮問会のためにお越しいただきまして、誠にありがとうございます。

コロナ禍の中でございますので、どのような形でこれを開催したものかと随分悩んだんですけども、熊本高専にとりましては大変重要な会議でございます。皆さま方から貴重なご意見をいただく場でございますので、何としてでも開催したいと思っておりましたら、感染の件も先日発表されました県の新たな基準とリスクレベルがレベル2、警戒ということでございますので、感染拡大につながる行動を避けまして、今回はこのような形で開催させていただきます。内容も絞り、この会場での本校からの参加者も最小限にしまして、他の者はこの遠隔で参加させていただいております。

学校からは、従来2つの話題をご説明しておりましたけども、今年は時間も短縮ということも考えまして、1つにいたしました。このキャンパスにいらっしゃったときに、正門に入られて、こちら左手の方に工事が行われておりますが、実はこれは新たに国際寮という寮ができるということで、今建築工事をしているところでございます。今年は、今回は、この国際寮を中心にご紹介、ご説明させていただきたいと思っております。

もちろん、本校の活動は、これ以外にもたくさんございます。例えば、国立高等専門学校機構が研究にもさらに力を入れるということで、今年度は「高専発！『Society5.0型未来技術人材育成』事業」とちょっと長いんですけども、「GEAR5.0 未来技術の社会実装教育の高度化」という事業を今年度から始めまして、今年度、初年度ですけども、全国51高専ある中で2つのテーマだけが採択されました。そのうちの1つが、「持続可能な地域医療・福祉を支えるeAT-HUB構想とAT技術者育成による共生社会の実現」というテーマで、このキャンパスの清田教授がそこにおりますけど、代表者となって採択されました。ATと申しますのは、アシスティブ・テクノロジー。障害者や高齢者などに対する支援機器、支援技術のことです。

たまたま昨日、このプロジェクトの初年度の一番最初の中間評価のヒアリングがございましたが、そこの席で高専機構の谷口理事長からは「ぜひ広く、地域と一緒に活動しなさい」ということを言われました。地方自治体ですか、県の工業連合会、特に金森さまのお名前も分かりましてですね、「ぜひ、地域の皆さまと一緒にやれ」という谷口先生からの直接のメッセージをいただいておりますので、金森さまはじめ自治体の方々にもあらためて、清田と一緒にご説明をお願いにまいりたいと思っております。

そのほかにも、経産省の「戦略的基盤技術高度化支援事業」、いわゆるサポイン事業なども採択されておりますが、先ほど申し上げましたように今回は国際寮を中心にお話申し上

げます。

本日は、非常に限られた時間ではございますが、ご説明する話題に限らず忌憚のないご意見やご指導をたまわりますよう、なにとぞお願ひ申し上げます。

これをもちまして、校長のあいさつとさせていただきます。本日はよろしくお願ひいたします。

【司会】それでは、本日の日程につきましてご説明いたします。会議資料の1ページをご覧ください。

まず、前回のこの会議において頂戴いたしましたご提言に対する、本校の改善に向けた対応についてご報告をさせていただきます。次に、本日の話題提供といたしまして、テーマをご用意させていただいております。このテーマについて、学校側からご説明いたしますので、委員の皆さまがその内容について意見交換をお願いいたします。その後、協議の内容を踏まえ、提言事項として整理をしていただければと存じます。

テーマの説明時間を10分程度、協議時間を20分程度と予定しております。以上、休憩をはさみ、全体の会議時間を2時間程度、会議終了時刻を16時頃と予定しております。

なお、本日の会議内容は後日報告書にまとめ、本校ウェブサイトに公開する予定としております。委員の皆さまからいただきましたご提言を抜粋して公開させていただきますので、ご了承くださいますようお願い申し上げます。また、議事要録作成のため、録音をさせていただきますことに併せてご了承いただけますようお願い申し上げます。

続いて、本日ご出席をいただいている委員の皆さま方のご紹介をさせていただきます。

熊本大学工学部長 連川貞弘さま。

【連川委員】よろしくお願ひします。

【司会】合志市長 荒木義行委員の代理として、合志市副市長 濱田善也さま。

【濱田委員（代理）】はい、よろしくお願ひします。

【司会】八代市長 中村博生委員の代理として、八代市政策審議監 山本哲也さま。

【山本委員（代理）】よろしくお願ひいたします。

【司会】熊本県商工労働部産業振興局局長 小牧裕明さま。

【小牧委員】はい、よろしくお願ひいたします。

【司会】熊本県中学校長会会长 徳永光博さま。

【徳永委員】徳永です。よろしくお願ひします。

【司会】熊本県工業連合会会长 金森秀一さま。

【金森委員】よろしくお願ひします。

【司会】平田機工株式会社常務執行役員 平田正治郎さま。

【平田委員】よろしくお願ひします。

【司会】櫻井精技株式会社代表取締役社長 櫻井一郎委員の代理として、櫻井精技株式会社管理グループ次長 田口智弘さま。

【田口委員（代理）】よろしくお願ひいたします。

【司会】熊本日日新聞社編集委員室室長 宮下和也さま。

【宮下委員】よろしくお願ひします。

【司会】熊本高等専門学校熊本キャンパス同窓会会长 原田茂さま。

【原田委員】はい、よろしくお願ひします。

【司会】熊本高等専門学校八代キャンパス同窓会会长 亀田英雄さま。

【亀田委員】亀田英雄と申します。よろしくお願ひします。

【司会】なお、本校関係者の出席につきましては、会議資料の名簿をもってご紹介に代えさせていただきます。

それでは、これより議事に入りたいと思います。会議規則第6条に基づき、議長は会長が務めることとなっております。連川委員におかれましては、会議の進行をどうぞよろしくお願ひいたします。

【連川議長】熊本大学の連川でございます。会議規則に従いまして、今回の議長を務めさせていただきます。何分慣れない役でございますので、議事進行ご協力をよろしくお願ひいたします。また、忌憚のないご意見をたくさんいただけましたら幸いでございますので、よろしくお願ひいたします。

それでは、早速、会議に入らせていただきます。限られた時間ですので、進行へのご協力よろしくお願ひします。

まず、最初の議題でございますけれども、前年度の提言等に対する改善に向けた対応についてでございます。会議資料の6～10ページをご覧ください。こちらに、昨年開催されました本会議において、熊本高専の教育研究活動等に対して委員の皆さまからいただきましたご意見を4つの事項に整理して提言させていただいております。提言した4つの事項に対しまして、熊本高専の方で改善に向けた対応を検討された結果が6～10ページにまとめられております。

内容につきまして、これから学校側からご説明いただきたいと思いますので、担当委員会、自己点検評価委員会の五十川委員からご説明をよろしくお願ひいたします。

【五十川】自己点検評価委員会委員長の五十川と申します。よろしくお願ひいたします。この後は、すいません、マスクを着けさせて説明させていただきます。

皆さん、お手元の資料をご覧いただきたいんですが、まず7～10ページまで提言でまとめてございます。資料の見方でございますけれども、トップの色付け部分が提言事項、そして下部の色付け部分がそれに対する自己評価ということになっております。昨年、頂戴しました提言に対する自己評価について、ただ今から簡単にご報告させていただきます。

昨年度の話題提供、まず1点目は「新カリキュラムの目標と教育の質保証について」。これは、新カリキュラムの目玉であるリベラルアーツ教育を中心据えたカリキュラム再編の話題提供でした。もう一点は、「本校のグローバルエンジニア育成の取り組みについて」。こちらは字句通りの内容でございます。

以上の2点につきまして、それぞれ2点ずつご提言を頂戴し、自己評価した結果を簡潔にご報告いたします。

まず1点目の話題提供については、7ページの提言事項、提言にございますような大変貴重な提言を頂戴しております。時間の都合でいちいち読み上げませんが、趣旨は、1番目、学生にカリキュラムの狙い、特にリベラルアーツ系科目を軸とするはどういうことか伝わるようになるとのこと、2番目、リベラルアーツ系科目を全面に出すことにより、最も重要な本来の専門科目がないがしろになるようなことがあってはならない。

そして、提言1-2では具体的な手法にも言及いただき、5時間、10時間とまとまった時間を取って、学生が主体的に学ぶ授業展開があつてよいのではないかとのご提言を頂戴いたしました。これに対して、1番リベラルアーツ系科目は専門科目をブリッジするための「ハブ」の役割を果たすのだということを再確認いたしまして、具体的には「リベラルアーツ入門」という科目がございますが、これに落とし込みを実践しているところでございます。また、この取り組みは、外部機関からも一定の評価を頂戴しております。すなわち、「三菱みらい育成財団助成」にも応募し、今年度採択されております。3番目、提言の1-2のご指摘の受け皿としては、リベラルアーツ実践1に落とし込み、成果の検証は今年度中に行うよう手配しております。以上のことから、対応を含むA、すなわち改善に向けた対応を実施していると自己評価いたしました。

次に、話題提供の2点目に関して、提言の2-1、2-2。9、10ページ頂戴しております。1つは、日本人の感性を持った方、海外で活躍しているグローバルエンジニアと呼ばれる方々を招聘しての教育を展開してはどうか。2番目、高専教員と海外研究者との共同研究を活性化させることにより、海外から企業にインターンシップが入るような環境となるのが望ましい。以上の提言を頂戴しております。

これに対して、1番目、海外で活躍しているグローバルエンジニアと呼ばれる方々を招聘しての教育は、来年度以降の事業計画を作成するチームに依頼するというのが結論でございますが、従来の実績をみると、香港 IVE のシステムセンターから講師を招聘して講座を開講したり、海外経験のあるOBを招いて講演会を実施するなど、従来から実施しているものが既にベースとしてございます。2番目、現在マレーシアの技術教育機関等の交流について意見交換を行っております。また、この度の話題提供にもなっておりますが、熊本キャンパスでは国際寮の新設が予定されておりまして、地元企業への留学生のインターンシップの受け入れを依頼する取り組みの下地も整いつつあります等々、詳細は判断理由と書きました欄をご覧いただきたいと思いますが、以上のことから、これから取り組むことにはなりますが、しっかりと改善に向けた対応を実施している、すなわち対応区分Aと自己評価いたしました。以上でございます。

【連川議長】ありがとうございました。昨年の提言、1つはリベラルアーツに関すること、それからもう一点がグローバルエンジニア育成の取り組みということでございました。ただ今ご説明がありました通り、提言させていただきました事項に関しましては、いずれも評

価としまして、改善に向けた対応を実施されていると自己評価をされておりますので、前年度の本会議への提言については、適切に取り組んでおられるということで評価させていただきたいと思いますが、委員の先生方いかがでしょうか。

【一同】はい。

【連川議長】では、ご了承をいただきましたので、評価といたしまして適切に改善に向けた対応を実施しているということで、最終的な評価とさせていただきたいと思います。

先ほど司会者から説明がありましたように、前年度の提言に対する改善に向けての対応というのは、熊本高専のウェブサイトの方で公開されるということでございますので、その点ご了解いただきたいと思います。よろしくお願ひいたします。

【平田委員】そこに書かれている内容の通りだと思うんですけど、1つだけちょっとリクエストじゃないんですけども、実際に学生側がどうだったという意見をここに載せてもらえると、われわれとしてはありがたい。

【連川議長】五十川先生。

【五十川】大変貴重なご意見頂戴しました。実は、三菱みらい財団のやっている事業というのは、検証するための取り組みがどうだったかなということを検証するための内容になっておりまして、そこでもちろん学生からのフィードバックも得られるような体制を取っております。どうもありがとうございました。

【平田委員】その通りだと思うんですけど、生の声を聞いてみたいなど、われわれとしては。

【五十川】 インタビューというか。

【平田委員】実施してどうだったという、学生側がですね。どういう受け取り方をしたのかとか、どう思ってたのかとかいうのが欲しい。そうすると、次のまた何かの提言などに役に立つんじゃないかと。

【五十川】アンケートで実施等はまだいたしておりませんので、アンケート等の実施をしたいと思いますので、どうもありがとうございました。

【連川議長】あとはご意見よろしいでしょうか。それでは、平田委員の方からございました点も踏まえて、評価というのをウェブサイトに公開するときには、ご意見も反映させながら、公開をさせていただきたいと思います。よろしくお願ひいたします。

それでは、次の議題に移りたいと思いますけども、次は今年度の話題提供でございます。国際寮の新設と今後の運用についてでございます。まず、最初に学校側からご説明をいただきまして、その後、委員の方々からご意見をいただき、昨年同様の提言にさせていただきたいと思います。

それでは、資料が会議資料 11 ページになります。それでは、熊本キャンパス寮務主事の島川先生の方からご説明をお願いしたいと思います。よろしくお願ひします。

【島川】皆さまこんにちは。熊本キャンパス寮務主事を担当しております島川と申します。本日は、話題提供ということで、「国際寮の新設と今後の運用について」というテーマで説明をさせていただきますけれども、よろしくお願ひいたします。

まず、こちらの写真をご覧ください。こちらは、つい先ほど冒頭で荒木校長からご紹介がありましたけれども、窓の向こう側には工事中の新しい国際寮のイメージ図です。ただ今工事中で、来年春、3月末の竣工の予定で工事が進んでいるところです。こちらの国際寮のままで目的なんですけれども、国際寮は国際的な視野を持つ実践的で創造性のある技術者を育成できるよう、留学生と日本人学生が混住を通じて国際交流が行える施設で、効率的に全国的に配置する必要から、統一したスタイルの施設となっていますというところです。

まず、日本人の学生と留学生が共同で生活できる場を提供する、それから共同生活を通じて国際的な視野を持てるようにするということです。こちらの施設は、全国国立高専 51 校のうち 17 校に設置されることになっております。九州内では、都城高専と本校の 2 校となっております。

建物は、鉄筋コンクリート造 3 階建てで、居室の数は 68 居室となっております。

こちらの国際寮の活用としては、本校には熊本キャンパスに明和寮という寮がございます。その寮生が滞在する、生活する新しい建物として活用される。それだけではなく、現在の海外から短期留学生、長期留学生が来ていますけれども、それらの学生も一緒に生活すると同時に、通学生ですね、通常は寮生じゃないんですけども、何かイベントとかあるときに、短期間、国際寮に一緒に生活する。そういう多目的な活用を考えているところです。

こちらは、熊日新聞に取り上げていただいたもので、今年の 8 月 9 日の朝刊の記事です。

こちらにあるように、シェアハウス型という形になっておりまして、会話は英語。受け入れる海外の学生は、日本語ができない学生がいらっしゃるので、生活の中での共通語は英語にするというところで取り組みをしていくこうと考えているところです。ちょっと字が小さいので、お手元の資料もちょっと見づらいかと思いますけれども、この辺で資料のご説明は終わりります。

次に移らせていただきます。国際寮の概要を説明させていただきたいんですけども、まず部屋がユニットと呼ばれる単位の区切りになっています。こちらが寮生の居住スペースになっています。ユニットが、全部で 10 ユニットございます。1 階の中央部分にはラーニングスペースという教室がございまして、こちらが寮生に限らず通学生の放課後の課外活動などにも利用できるようなスペースとなっています。寮の真ん中から、ちょうど右、左と分かれるような形になっていまして、将来的には例えば、右側は女子寮、左側は男子寮という使い方もできるようになっています。

ついでにちょっと申し上げると、1 階部分にキッチンがございます。各ユニットにも小さなキッチンがあるんですけども、1 階部分のキッチンについては、ムスリムの学生等の食事が、通常の学生向けとはちょっと分けて対応しなくてはいけない、ハラールに対応しなくてはいけないというところで、特別にキッチンスペースが造られているところです。

各ユニットについてご説明いたします。各ユニットは、6 ~ 7 人が居住するようなスペースになっております。各個人の部屋もあるんですけども、各個人の部屋にはベッドと机というシンプルな構成になってまして、主に真ん中にある交流スペースで過ごしてもらうよ

うな、そういう造りになっています。この1つのユニットの中に、トイレ、シャワー、洗面、洗濯、これら基本的には生活ができるものが整えられていると。現在の本校にある寮では、1つのフロアに大きなまっすぐの廊下があって、その両隣に居室が並んでいる、真ん中辺りにトイレがある、洗面所がある、洗濯場があるという造りで、自分の部屋に入ってしまうとなかなか顔をお互い合わせないような形になるんですけども、こちらのシェアハウス型と呼んでいる形ですと、主に交流スペースで過ごすということに期待しているところで、各ユニットの中には日本人の学生、留学生、短期留学生などが一緒に住んで、学校以外での時間でも国際交流を推進できるようなことを期待しています。

こちらの資料は、本校が締結している海外の教育機関等を列挙している図です。主に東南アジア、アジア地域が多いんですけども、例年、海外の提携校から留学生を受け入れるとか、逆に本校の学生を海外の学生に派遣するとか、そういうプログラムも行っているところです。残念ながら、今年度につきましては、コロナの影響でそういう交流ができていない状況ではあります。こちらに挙げてある提携校以外にも、九州地区の高専で締結した包括協定を結んでいる教育機関ですか、高専機構全体で取り組んでいる包括協定というのもございます。

本校が行っている国際交流の中で、受け入れについてご紹介しますと、大きく分けて3つのタイプがあります。1つは長期の留学生。こちらは本校の3年生に入学してくる学生のことをいっています。3年に入学した後、3年、4年、5年と勉強して卒業している学生。彼らは入学前に半年～1年、日本語の勉強をしてくるので、日本語がかなり話せる状態で入学してきます。なので、日本人と混ざって教室で、日本語で授業を受けて卒業していくようなタイプの学生です。短期の留学生は、2～3カ月程度の期間来て、研究室に所属して指導教員の指導の下で研究室でプロジェクトをする、研究プロジェクトをするようなタイプの留学生です。彼らの多くは、日本語が全く話せない状況です。研究室の中での交流というのが主になります。3番目に挙げているのが、国際交流プログラムの参加学生です。こちらは数日～2週間程度滞在する学生で、主に長期の休みですね、夏休み期間、春休み期間に行うイベントとして参加する学生です。内容としては、文化交流とか技術ワークショップなどを行っています。

今、お見せしているこちらのグラフは、どれぐらいの人数をこれまで受け入れてきたかというグラフになっております。2009～2019年までの11年間分を集計しているところです。

4月1日から年度末、3月末までのグラフなんんですけども、授業期間ですね、前期の期間、あと後期の期間、こちらは主に短期の留学生が来ています。2～6カ月程度滞在する、研究室でプロジェクトを行うという短期の留学生です。夏休みの期間、春休みの期間に突出しているのは、国際交流プログラムに参加している学生を受け入れているところです。

留学生で、先ほど長期と申しました3年生に留学して、日本語で勉強して3年後に卒業していくタイプの学生については、毎年両キャンパス、熊本キャンパス、八代キャンパスそれぞれ2～4名ずつ来ております。彼らは寮に滞在しています。こちらの表は、その人数を表

しています。近年では、マレーシア、モンゴルから来る留学生が多いです。

こちらは短期留学生、2～6ヶ月程度という留学生の活動についての紹介です。彼らは、授業期間中に本校にやってきます。毎年20名前後の学生を受け入れているところです。前期に10名程度、後期に10名程度というところです。滞在中は、寮に滞在するんですけども、寮の部屋の数の制限によって、同時期には10名程度しか受け入れられていなかったというのがこれまでの現状です。こちらの写真をちょっと簡単に紹介させていただきますと、研究室に所属して研究プロジェクトをやり、期間が終わりの頃には成果を発表すると。

研究室の日本人の学生と交流したりして、日本の文化交流などをやっているところです。

これは、海外から来る短期の留学生に日本の文化とかを知ってもらうということもあるんですけども、日本人の学生も海外の学生と接していくいろいろ学ぶというところも、大きな役割があります。

続いて、国際交流プログラムに参加する、数日～2週間程度の場合、こちらはちょっとグループが大きい、10～30人程度のグループでやってきます。彼らは寮ではなくて、近隣のホテルに滞在しています。これは、寮では短期間だけ受け入れというのはなかなか難しいので、現在までは近くのホテルに滞在して、学校でイベントをするときに来てもらうという形で行っています。研究室の紹介ですか、クラブ活動、日本独特、これは弓道の様子ですけど、そういうところを紹介したり、あるいは2日、3日とか短い期間で達成できるようなプロジェクトをやって技術的なこういうものをやっています。

この図は、本校が取り組んでいるグローバル教育に関するところをまとめたものです。左側の青い部分は派遣、右側が受け入れという形になっています。派遣については、低学年、例えば希望者を集めての台湾研修ですか、全学年が行う英語研修、4年生では海外研修旅行としてシンガポールをはじめ、東南アジア系の海外にいわゆる修学旅行のような形で語学研修とかそういうことをやっています。5年生辺りになりますと、先ほど紹介した国際交流プログラムに参加する学生も、これは5年生に限らず3年、4年、5年ぐらいから参加する学生は募って一緒にやっているところです。途中で海外に留学する学生もありますし、専攻科生辺りでは海外インターンシップに参加する学生も出ています。また、受け入れについては、短期の留学生は研究室に所属するので、5年生と専攻学生辺りが一緒に活動する対象の学年となっています。それから、国際交流プログラムを受け入れるときには、3年、4年生、5年生辺りが中心となって受け入れをしているところです。近年では低学年向け、1年生、2年生辺りにも海外からの学生が来たときに、一緒にできるようなプログラムも少しずつ増えてきているところです。

こちらが最後のスライドとなります。今回、運営諮問会議の中でお聞きしたい事項としては、まずただ今ご紹介した国際寮をどう活用していくか、そういうアイデアをいろいろとご提案していただければありがたいと思っております。その中で委員の皆さまが取り組まれているそれぞれの場所での国際交流などをご紹介していただければと思います。その中で、ここに書かせていただいている地元の自治体、企業、教育機関等との連携した活動というと

ころを、これからもう少し、もっと広げていければと思っているところで、地域の交流ですね、地元合志市ですか、八代市での地元での交流ですか、あるいは留学生を含めた共同研究、インターンシップの活動。これは、アイデアソンというのは、例えば企業さまから何かテーマを出してもらって、そのテーマに取り組むような国際交流の活動プログラムとかが作れれば、国際寮を舞台としてそういう先覚的なイベントができるのではないかといったところがあります。

あと、先ほどの中でもございましたけど、地元の企業に留学生を、例えばインターンシップ受け入れ等をお願いするとか、あるいはインターンシップではなくても企業見学、工場見学とかそういったところでご協力いただけるようなことがあればと思っているところです。

以上、簡単ですけれどもご紹介いたしました。いろいろとご提案をいただければありがたいです。どうぞよろしくお願ひいたします。

【連川議長】島川先生、どうもありがとうございました。それでは、ただ今、国際寮につきましてご説明をいただきましたので、最後にご提言いただきたいということで、国際寮の活用の方法であったり、どういうふうに国際活動、交流活動を取り組んでいるかということについてお聞きしたいということでございましたけれども、まずはご説明いただきましたことに対して、何かご質問等、それから確認したいこととかございませんでしょうか。

金森委員、どうぞ。

【金森委員】ご説明ありがとうございます。いくつか質問などをさせていただきたいと思いますけれど、今、前期後期で長期の人は 10 名ずつぐらい、20 名ということでしたけれども、この国際寮が出来上がった後というのは、どれぐらいの留学生の受け入れを予定されているのかということですね、このプロジェクトが決まったのは多分コロナ前だと思うんですけど、ぜひクラスター対策ですね、それをしっかりとやっていただきたいというのが 2 点目です。3 点目は、高専さんの場合、結構先端的な技術をやってらっしゃると思うんですけど、従来以上に、今、米中の問題とかそういうのが発展してきて、先端技術が経済だけじゃなくて軍事技術にも使われると。そういうところで機微技術に対する対応というか、そういうものはどういうものを今されているのか、今後どういうふうにされようと思っていますらっしゃるのか、そういうところ 3 点です。

【島川】どうも、ご質問ありがとうございます。まず、最初の質問を行いました受け入れの人数についてですけれども、現状は寮のキャパシティ、受け入れられる部屋の数とかで同じ時期に 10 名ということになっていますけれども、国際寮、ご紹介した 68 部屋がございます。その中で、今の計画では 68 のうちの 50 名を通常の寮生が使用する、残りの 18 室を短期の留学生ですか、あるいは国際交流プログラムに参加する学生がもしそのタイミングでいたら滞在する、あるいは通学生が短期の留学生と同じタイミングで共同生活を数カ月送るとかですね、そういったところに 18 室を今空けております。

もう一つ特徴的なのが、夏休み期間ですか、冬休み、春休みという長期の休みの時期には、寮生は自宅に帰省することになりますて、その間は、国際寮に滞在している 50 名の寮

生であっても、荷物を一旦、既存の建物等に移すことで空き部屋をつくって、その期間、春休み、夏休みとかに、多くの国際交流プログラムに参加する学生を寮で受け入れられる。現状としては、ホテルを利用せざるを得なかったところを、この国際寮を活用できると考えております。

2つ目にご質問いただいたクラスター対策ですけども、これはなかなか難しいところで、現在の寮においてもクラスターが発生しないようにいろいろな取り組みをしているところです。国際寮に滞在できるようになったとしても、そのことはしっかりと対策を取っていかなければならないというところです。これは、今現在の寮にいる寮生とか、熊本キャンパス、八代キャンパスそれぞれ取り組みをしているので、その辺のノウハウを蓄積して、シェアして、新しい国際基準というか、海外からの学生を取り入れたときに、安心して受け入れられるようなそういう対策をしていく必要があるかなと思っております。

最後の質問でした機微技術の面については、こういうプロジェクトを引き受けるときに、プロジェクトの中で知り得た技術を放棄するというか、規約を一応、誓約書みたいなものを短期の留学生を受け入れるときには、誓約書を書いてもらっております。今までに、それで何かトラブルになったということはないんですけども、現状対策としてはそういう誓約書を提出してもらっているというところです。私から答えるのもあれなんですけども、何かもし。

【校長】はい。

【島川】校長先生お願いします。

【校長】荒木からちょっと補足させていただきますが、その前にまず高専全体の国際化の動向について簡単に紹介いたします。

国立高等専門学校は全国で51校ございまして、その全体を取りまとめているのは独立行政法人国立高等専門学校機構というところなんですけれども、最近は特に国際化に力を入れております。日本の高専自体も国際化ということもあるんですけども、実は日本の高専の教育システムというのは、外国からも大変高く評価されておりまして、日本の高専と同じような教育システムをうちの国にも作ってちょうだいよ、というご要望が幾つもございまして、実はモンゴルでは、もう6年以上前に日本式の高専を作っておりますけれども、日本の高専は本科は5年ですから、2回目の第2期生までが卒業しております。それから、タイでは昨年度、日本式の高専が1つできました。それから、今年度また2つ目の日本式の高専ができているというところでございます。ベトナムでも、随分前から作ろうということで、政府間ですか、いろんなJICAみたいなところと一緒にになって準備しているところでございます。それから、それならばっていうんで、インドネシアも手を挙げて、うちにもだ、ということで、大変外国からの関心も高まっております。

特に、タイは昨年度作って、今年度2つ目を作るということで、まだ作ったばかり、立ち上げの時期ですので、そこを日本の国立高専が全面的にサポートしているところであります。10人以上の先生方が今タイに行って、立ち上げのカリキュラム整理をしてみたりと

か、タイの先生方に日本式の高専の教え方みたいなをお伝えしたりとか、そんなことをやっております。

そういう背景のもとに、それをやると、そういう外国に出て経験を積んだ方が、また日本の高専に戻ってきたら、それぞれの高専のまた国際化が一気に活性化されるという、そういうこともありますけれども、実は先ほど1つ目の受け入れ人数の見込みなんですけれども、タイの高専とか、そこがですね、今はまだ最初のところは2年生ですので、3年生以降になりますと、日本に行って、半年とか1年とか日本の高専でインターンシップを受けるとか、日本の高専にまた長期留学、短期留学ということで、日本の高専で受け入れないといけない学生の数が大幅に増えていくことが見込まれます。ですので、先ほど島川先生の18室というのは、ちょっと今後、実際そういうことが回り始めたら18室じゃ足りないかもしれませんんですけども、そうなったら既存の寮との対応でいろいろやりくりして、受け入れ人数、その場その場に応じた形で対応していくかないといけないんじゃないのかとは思っておりますけども、そういうことで外国の学生さんが日本の高専にやって来るというのは非常に今後見込まれます。

それで、51校の中の17の高専に、この範囲のところで国際寮を造って、泊まりのところでそういうことを中心となってやるということで、これは熊本キャンパス、そこに寮を今建設するということでございます。

それと、実際の活動は、これまで本当に短期の留学生を受け入れるところがなかったものですから、さっきの島川の説明みたいに、あまり大きな人数も受け入れられないし、活動の幅も限られていたんですけども、国際寮ができることによって、いろいろな形の受け入れ形態ができる。それから、プログラムもいろんなプログラムが展開できる。特に期待しているところでございます。

先ほどの昨年度の提言2-2のところにもございましたように、地域の企業さまにも協力していただいて、外国人留学生をインターンシップ、あるいは会社見学を受け入れていただく。そのときに、留学生だけじゃなくて、うちの高専の学生を付けて、高専の学生をある程度付けて、それでペアになって企業を訪問すると、ついて行く日本人の学生は当然留学生とずっと一緒にいるから、日本のしきたりですとか、企業の文化みたいなこともある程度伝えなきゃいけない。その学生にとっても、日本の文化のこととかも知るいいきっかけになるんじゃないかなと思っております。もちろん、コミュニケーションは英語でやるわけです。もちろん、その留学生と一緒に会社の見学もさせていただく、インターンシップもやる。日本人の学生も、会社でのいろんな疑似的な経験、勉強にもなるということで、こういうことができたら素晴らしいなど、私個人的には楽しみにしているところでございます。

それから、3番目の米中の関係の悪化のことなんんですけど、これはですね、中国は日本の高専にあんまり興味ないんです。先ほどのモンゴルとか、ベトナムとか、インドネシアとか、タイとか、そういうところはものすごく関心が高いんですけど、中国は日本の高専に対してはあんまり関心がない。なぜかというと、それは中国人は漢字が読めますから、「高等専門

学校」と、それで中国語でそのまま中国の人が漢字で「高等専門学校」というと、「なんだ、専門学校か」というような反応なんですよ。香港とかはお付き合いがものすごくあるんですけども、中国本土の方々とはあまり付き合いがなくて、それで中国人が実際に来たって例があんまりないんですよね。それもあって、先ほど島川が申し上げたように、幸いなことにそういうトラブルがあったと今のところないと。ですから、中国人の日本の高専に対する認識が変わらなければ、従来通り、中国とはあんまり密なお付き合いはないんじゃないかと考えております。以上、ちょっと補足させていただきました。

【連川議長】宮下委員、どうぞ。

【宮下委員】今、熊本キャンパスに関していいますと、まず既存の寮が今ありますよね。こちらには、今長期の留学生の方々が滞在をしておられるということですかね、今現在。

【島川】今現在は、はい。そうです。

【宮下委員】それが、2020年度だと大体4人ぐらいという。

【島川】留学の人数なので、4人掛ける3学年とか。今現在、熊本キャンパスは8人の留学生が滞在しております。

【宮下委員】なるほど。熊本キャンパスでいうと、既存の寮にプラスして国際寮ができる、収用人数としては68人の収容人数が新たに加わるということですね。

【島川】そうです。

【宮下委員】その中で、通常の寮生、大体50人ぐらいを予定しているということになりますと、その中の50人の留学生と日本人の学生の内訳みたいのは、イメージはあるんですか。

【島川】すいません、説明が悪くて。国際寮に50名と申した数字は、現在寮に住んでいる日本人の学生と長期の留学生も含めて、その50名をその中で使うと。残りの18室については、数ヶ月単位とかで来る短期の留学生を、今までだったら10名しか同時に受け入れられなかつたところを18人までは受け入れられるようにというので、ほぼ倍に増やしたこと。

【宮下委員】短期の場合はですね。

【島川】はい。

【宮下委員】長期の場合は、そうすると今、全学年で十数人というのがもっと増えることになるんですかね。

【島川】今までしていた流れですと、毎年それぞれのキャンパスに2人、多いときで4人ぐらいが留学していました。先ほど荒木校長から紹介があったように、海外に立ち上っている高専から日本で学ばせたいという要望がありますので、そうなってくると、今受け入れている2~4人という数字が、もっと増えてくる可能性が増えてきます。

【宮下委員】その数字は、何か今のところ見込み数みたいのは、特に設けてらっしゃらないんですか。

【島川】今のところ、私の耳には入ってきていませんけれども。

【大塚】ちょっと補足させていただきます。副校長をしております大塚と申します。

長期の留学生は、各高専に行く前に、東京にございます日本語のトレーニングとか、日本語で授業を受けるというトレーニングを半年から1年程度やっております。それを経てから来るんですけれども、そのときに長期の留学生はどこの高専に行きたいか、自分の学びたい専門性と照合、マッチングさせて、受け入れ可能な人数等、もちろん希望先の高専と「こういう学生が希望しております。受け入れられますか」というすり合わせをした上で派遣されます。

希望がかなりありますので、高専によって受け入れ人数に、全国的にみると、これは多い所、少ない所と、均一ではないと。こういった国際寮ができて、非常にいいファシリティで、いい教育が受けられますよという形になっていくと、自然とそこのところが多くなると。

傾向としては、東南アジアの方から来たりなんかしますと、雪、スキーなんかも楽しめて、東京にも近くてという所の高専が比較的人気の高い傾向にございます。しかし、国際寮で魅力のあるプログラムを、これから提供して力がつくぞ、ということになってくると、ここの人�数が変わってくるんじゃないかなということも考えられます。そういうバックグラウンドがございます。以上です。

【連川議長】はい、平田委員。

【平田委員】質問といいますかね、非常にこれいいことだと思うんですけど、目的に最初書いてありますけども、今日もいろいろ理解してると、日本の高専生のためというよりも、海外の留学生のためのカリキュラムのような感じがしています。ですから、日本の学生もね、海外の学生さんたちと交流することで、ここにあるように国際的な視野を持つとかそういうのも当然あっていいと思うんですけども、それ以外にもっと本質的に、海外の学生と接することで学べることがほかにあると思うんで、それを明確にした方がいいような気がします。そういう意味で、日本の税金とかそれで日本でされてやっているわけですから、ぜひ日本の学生主体、日本の学生ファーストの考え方。

それと、さっき食事でハラールの話があったじゃないですか。私の経験でいくと、マレーシアとかに行くと、牛が駄目な宗教、豚が駄目な宗教ありますよね。そうすると食堂もそうですけど、皿から全部分けて管理していないと殺し合いが始まるということで、あの辺は考えてますよね。ぜひ、その辺注意してください。以上です。

【島川】ありがとうございます。最初のお話にあった日本人ファーストであるという日本の学生でいくところは、まさに私の思いと同じところです。この国際寮の趣旨も、まさにその通りでして、海外から学生を受け入れるという、海外の学生向けというのがちょっと表に見えがちなんですけれども、実際は海外からの学生を受け入れることで日本人を育てたい、日本人の学生に国際的な感覚、グローバル意識を持たせたいというのが、この国際寮を設置する主な趣旨だと考えております。

それと、ご注意いただいたハラールですか食事の件についてですけれども、まさにその辺りは、かなり注意深くやらなくてはいけないと思っているところで。現在もマレーシアか

らの留学生などを受け入れている状況で、寮の食堂ではハラールに対応した食事を提供していただいている。今までの私の経験の中では、それ以外で宗教的な理由で食事の制限があるという学生については、ちょっと私の記憶ではなくて、通常食とハラール対応食という2つの対応は寮の食堂でできるところです。

これから、国際寮ができて、もし寮の食堂じゃなくて自分たちで食事をするときにも、食器を分けるとか、それを洗うシンクも完全に分けるとか、そういう対応が必要になってくるかなと思います。ハラールであっても、戒律の厳しいタイプとゆるいタイプとか、いろいろあるので、厳しい方に基準を合わせる必要があるのかなと考えているところです。ありがとうございました。

【田口】私も、平田委員と全く同じ考え方なんんですけど、そもそも国際寮というのは、そもそも論からいうと、やはり日本人学生のグローバル化というのが一番の趣旨だと思います。それで、やはり箱物だけ造っても、その箱があってもその中でどういうふうにして運用していくかというところの計画は、さらに重要になると思います。それから、寮に入寮できる学生というのも、高専の学生さん全員に対したらかなり少ないとしますので、特定の学生だけではなくて、限られた資源の中でどういうふうに多くの学生さんが日本にいながら海外経験ができる、経験ができるようなプログラムを見たいというのが、やはり一番重要な課題ではないかなと思うんですけども、いかがでしょうか。

【島川】ありがとうございます。そういう取り組みが必要であるということは、重々認識しているところであります。海外からの学生等が増えることによって、キャンパスのいろんなところで海外の学生の会うチャンスがあるというのは、日本人の学生にとっても、すごくメリットがあって、現在学校の中にも海外の学生と話ができるようなスペースも用意しているところで、国際寮と合わせて。

そういう施設ができるてくるわけですから、そういったところをうまく活用して、寮の中の生活に閉じたことではなくて、キャンパスの中全体、熊本キャンパスだけでもなく、八代キャンパスも含めて、熊本高専でそういう国際交流が日常的に、普段のこととして、学校の中で行われているような、そういう雰囲気づくりというのがこれから必要になってくるかなと思っているところです。ありがとうございました。

【連川議長】はい、どうぞ。

【徳永】すいません、お尋ねいいですか。分からないので、ちょっと教えてください。長期の学生は、日本語を勉強してくるのでっていうことだったんで、多分日本語、普通の授業にも入ってやられている。短期の人は、日本語あまり分からぬということだったんですけど、この生徒たちは授業に入っているのかどうかという。

【島川】短期、2カ月から数カ月で来る学生は、授業は受けてないです。クラスに行って、授業の様子を見ることはありますけど、それで授業を受けて単位を出すとかそういうことではない。

【徳永】見学っていう感じなんですか。

【島川】見学程度はあります。主に短期留学生の活動は、研究室に行って指導教員と一緒に、あるいは研究室の日本人の学生と一緒に、プロジェクトをやっていくという、それが主な目的です。

【徳永】もう一つは、夏休みとか春休みに来る何とか交流。その子たちは何をするんですか、休みの日に。

【島川】日本人の学生は授業は普段やってない、休みの期間ですからやっていないんですけども、そのときに海外から、例えば20人グループが来ますってなったときに、日本人の学生も20人ぐらいまた集めて、その期間一緒にやってプロジェクトをする。例えば、グループに分かれて、日本人と海外の学生が混ざった、2人、2人の4人のグループを作つて、一緒に何か課題に取り組むとか、最後にコンペやってどのチームが勝ったとか、そういうことを取り組んだりとかもやっています。

【徳永】分かりました。ありがとうございました。

【連川議長】まだまだ、ご意見あるかと思いますけれども、予定を押していました。時間も既に10分ほど過ぎてしまいました。

それで、皆さま方からいただきましたご意見を整理いたしますと、おおよそ2つぐらいに分けられるのかなと思います。1つは、今もお話がありましたけども、留学生の受け入れに関して、受け入れた後でのプログラムのこと。それから、もう一点は国際寮が建った後に、寮の中でどういうふうに日本人学生を国際化させていくのか、その具体的なプログラムについてということが、大きな2つのご意見だったかなと思います。

それで、この2つにつきまして、さらにいただいたご意見を参考にいたしまして、熊本高専さんと調整しながら、私の方で提言事項としてまとめさせていただきたいと思いますけれども、よろしいでしょうか。

それでは、議長に一任いただくということで、ご承認いただいたということにさせていただきたいと思います。

では、後日まとめさせていただきました提言につきましては、また委員の先生方には目を通していただきまして、その上でまだご意見がございましたら修正等を行つて、最終案とさせていただきたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

それでは、ここで10分間の休憩を取りたいと思います。現在15時5分ですので、15時15分から再開をさせていただきたいと思いますので、よろしくお願ひします。では、休憩させていただきます。

(休憩)

【連川議長】それでは、休憩時間が終了しましたので、残りの時間、16時終了予定でございますので、15時55分ぐらいまでの時間をフリートーク、フリーの意見交換させていただきたいと思います。委員の先生方から何かご意見等ございましたら。

どうぞ。

【亀田委員】先ほど校長先生から、モンゴルで高専の教育をしているという意見を聞いて、

久しぶりに思い出したものですから。2年ほど前に、佐世保高専の50周年の祝賀会に出掛けたんですよ。そのときに、そこの卒業生はモンゴルで高専の教育を輸入するんですよね。

一生懸命話してくれたことを久しぶりに思い出して、そして「私がモンゴルと佐世保の架け橋になります」ということまで言ってくれて、非常に愉快にその式典を過ごせて。素晴らしい生徒ですね、バイタリティのある学生ですね、そこを卒業して国と掛け合って、行ったという話を聞かせてくれて、「八代も頑張ってください」というエールをもらったんです。

そこでなんんですけど、熊本キャンパスではそういうことを取り組まれているという話で伺ったんですが、まだ八代でも国際交流をいろいろされているんですが、八代の方はどういう計画で進められるんですか。

【田中】八代キャンパス副校長の田中です。八代キャンパスについては、再来年度、一応、計画としては、寮の大規模な改修が予定されているのもありますし、そこで国際的な、今、熊本キャンパスの国際寮は単独でできる形になっているんですけども、寮の改修のときに国際化を意識した混住型のスペースをたくさん造るという形で今、計画を練っているところがあります。

具体的なことにつきまして、寮務主事の上土井にお願いします。

【上土井】八代キャンパスの寮務主事を務めております上土井といいます。よろしくお願いいたします。

今、副校長の話にありましたように、八代の方は新たに建物を造るんじゃなくて、既存の建物を改修して混住型という形で計画しております。2人部屋、3人部屋あるんですけど、基本的に全部個室にするという話ですね。既存の寮の中で交流するようなスペースを造って、国際寮という建物じゃないんですけど、そういう形で今、考えておりますというか、そういう計画をしております。

【校長】最後に校長の方から少し。これは、熊本高専全体としての国際寮でございますので、たまたま熊本キャンパスに建ちますけれども、先ほど島川から紹介があつたいろんなプロジェクト、プログラムは、八代の学生も参加してもらう。そのときに、八代の学生からみると、ちょっと熊本キャンパスに来て、合宿で留学生と、あるいは熊本キャンパスの学生と一緒にイベントに参加するということがいろんな形ができるようになると思っているところでございます。

熊本高専も、熊本電波高専と八代工業高専が統合し、高等専門学校になりましたけれども、それはもう11年もたっておりますので、今、できるだけ両キャンパスの交流、融合を進めようということで、実は昔、共通教育科目っていってましたけれども、国語とか社会とか、そういうところのカリキュラムを両キャンパス統一して、科目名もカリキュラムも統一していると。そういうところから始めて、キャンパス間をもっともっと風通しよく、いろんな形で気軽に行き来できるように、幸い北熊本のスマートインターチェンジもできましたので、昔に比べたら随分早くなりました。そういうこともあって、地理的な距離感覚も縮まり

ましたし、もうちょっと学生、教職員、キャンパス間の共有感覚、精神的な共有感覚をもつともっと縮めて、一緒になってイベント、教育プログラムの展開というのもやっていきたいし、そういうことをやれる、先ほどの八代の寮も改修されますし、国際寮もできる、そういう環境の下でそういうことを展開していきたいと思っておりますので、亀田先輩、あんまりご心配にならないで、八代の学生ちゃんと一緒に参加してやりますので、よろしくお願ひいたします。

【連川議長】ありがとうございます。

【亀田委員】もう一つ。ありがとうございます。その中で申しましたように、先ほどからもご心配があるように、学生ファーストはもちろんなんですが、私がモンゴルと佐世保の架け橋になるぞ、というようなバイタリティのある学生を育てていけるような環境もいいんじゃないかな、ということも、意見として申し上げたいと思います。

【連川議長】今、亀田委員のご意見にちょっと関連するんですけれども、本学工学部ではモンゴルと3年次の国際編入学というのをやっております。やはり、モンゴルの学生さんって日本のことや教育面、かなり興味を持っておりますので、高専の方でそういう編入学というができるかどうか存じ上げませんけれども、もしそういう制度的にできるのであれば、例えば高専になると3年生か、それか専攻科でしょうかね、そういう学年ぐらいに国際編入学というので、より国際化するというような話もあるんじゃないかなというふうに考えていて。

【校長】これは、先ほど申し上げたように、去年、第1期生が卒業しまして、モンゴルの高専の第1期生の卒業生の中の何人かは日本にやって来て、日本の高専の専攻科に進学したりもしております。ですから、当然、そこも見込んでおりますし、それから日本の高専に編入してくる、例えばタイの高専の学生もいるでしょうし、編入ではなくて、さっきもちょっと申し上げましたけど、1年ぐらい長期に日本の高専で教育を受けるという、いろんな形の行き来が出てくるということを期待しているところでございます。

【清田】ちなみに。熊本キャンパスの教務主事の清田です。

今年は、実は3年生にモンゴルから1名、寮生が今年来ているんですけども、コロナ禍でずっと遠隔授業で、4月からずっと国の待機で。今月、先週ですか、今週ですかね、成田に2週間待機した後、やっと熊本キャンパスに到着しまして、今からやっと授業に同級生と対面してやるというような形でやってますので、かなり遅れていますけれども、1回も日本に来たことがなくとも、かなり優秀な学生なので、ほかの担当から聞くと、すごく追いついていると、遠隔授業を受けて、日本人の言葉で日本語での授業をモンゴルから受けて、ちゃんとついてこれるということなので、かなり期待しております。すいません。

【連川議長】ありがとうございます。やはり大学も同じような状況で、やはりモンゴルからの留学生が来日できないということで、やはり遠隔授業を受けるか、場合によっては、人によっては、留学して半年間の休学という措置を取って、来れるようになってから授業を受けるという対策を取ったりとかしています。

平田委員、どうぞ。

【平田委員】こちらから留学する人というのは、年間何人ぐらいですか、本学から海外に。

【大塚】年によって、学年も違うんですけども、いわゆる JASSO の「トビタテ！ 留学 JAPAN」ですね、ああいったものに採択されて、行く学生が結構おられます。濱田委員のご子息もそういった制度で行かれましたけれども、昨年度の実績ですと、全国の中でもかなり多い人数が採択されました。その人数は確か、7か8ぐらいだったか、6、7ぐらい、すいません、正確な人数を今申し上げられなくて。それぐらいの人数が行っております。これは比較的多い、1年で行く人数としては多い。通常、専攻科生とか本科生でも行くんですけれども、2、3人ぐらいは手を挙げて行っているかなという印象でございます。

【平田委員】その学生はどちらに行かれるのか教えてください。

【大塚】昨年行ったのは、カナダ、バンクーバーの方ですね、それとシンガポールが非常に多くございます。女子学生、ニュージーランドもやっておりました。

【平田委員】いや、だからどちらかと言うと、海外から来られる方は東南アジアが多いじゃないですか。だけど、日本の学生は、多分、東南アジアじゃなくて、そういう欧米とかに行きたがるんだろうなと思って。だから、そこら辺のミスマッチみたいなんじゃないけど、その辺は学生の希望と、受け入れている学生の。

【大塚】国際交流プログラム、これが熊本キャンパスの方ですと、シンガポールでの海外研修とか4年生で全員行っているというのを以前にもご紹介したかと思うんですが、そういったところと、あと低学年では先ほど話があったように、2年生ぐらいから希望者は台湾に行ったり、マルチにいろいろ行っております。香港の方での国際交流プログラムに、これも人数的には小規模でございますが派遣する。こういったことをきっかけに、「今度はヨーロッパに行きたい」「今度はアメリカに行きたい」、ニュージーランドとかああいった、いわゆる、ほぼ、マルチの英語圏に行ってみたいという学生がステップアップする形で留学を希望しているというような傾向がみられます。

【平田委員】2016年からのこの表を見ると、欧米はないのはたまたま。

【大塚】交流プログラムの受け入れというところでは、香港、それからシンガポールが非常に多くございまして、欧米の留学で先ほど申し上げたような、いったところがまた引き受けている、いわゆる相互交流というところまでは今のところ発展していませんが、担当のグローバルリーダーシップ育成センターの方では、その受け入れスタッフとも少人数のそういう学生の交流を通してコンタクトを取りながら、相互交流の道を模索しております。

【平田委員】何でそういうことを聞くかというと、将来、会社に入って、海外でやっぱり仕事をするでしょうから、どちらかというとビジネスのあるところの国に行った方が、学生のためにはいいのかなとは思っていますが、逆にいうと、そのビジネスのあるところが交換留学生も受け入れた方が何かといいんじゃないかなという考えなんですから、それだけです。

【校長】どうもありがとうございます。確かにおっしゃる通りだと思うんですけども、今、

大塚副校長が行ったように、最初にこちらから海外研修で行く場としては、東南アジアというのは、私も最初聞いた時に「えっ」と。英語研修とか行っている分で、「えっ」とか思つたんですけど、私も一緒に現場を見に行つたんですけど、これは意外とコストパフォーマンスが良くて、例えばベトナムのハノイ大学に行っているときに、私もハノイ大学に行って見てまいりましたが、ハノイ大学は語学のレベルがすごく高くて、英語のプログラムも1週間とか2週間とか短期のプログラムなんですけども、とてもレベルの高いプログラムをやってて、しかもベトナムのハノイ大学の学生寮を使わせてもらう、飛行機代も安い、そういうことで非常にコストパフォーマンスにいい海外研修してるなと思いました。

その結果、やっぱり、その研修も2回も3回も受ける学生もいますし、次はアメリカだ、次はイギリスだ、というふうになっている学生もいるということで、こうしたことのございますけれども、もう一つですね、やはり東南アジアだけじゃなくて、やっぱり欧米の大学も、というので、欧米の大学と交流協定を結ぶというのも、私ども力を入れておりますし、例えば一昨年の年度末にイギリスのレディングに行って、そこと交流協定を結んでまいりました。私と学生主事の光永と2人で行ってきたんですけれども、イギリスのレディングというのは、昔はオックスフォードの一部だったらしいんですけども、レディング大学ですら、学生にいろんな国際経験をさせたいと。だから交流先を見つけていたり。彼らから熊本高専は交流先に足り得るというふうに思われて、それで交流協定を結んできました。

これも、いろんな若い学生に国際経験、いろんなことを経験させたいというのは、もう全世界的な傾向かと思いますので、また交流先も、特に欧米の方の交流先にも今、力を入れて発掘しているところでございますので、だんだんそういうふうになればいいなと思っております。

【平田委員】交流先という意味では、ご承知かと思いますけど、フランスの大学は必ずインターンシップ、3ヶ月から半年ぐらい。フランスの大学っていうのは狙い目なのかなと思います。それから、学生さんが国際インターンシップに行く場合に、その受け入れ先というのには学校の方で組織的に準備されているのか、それとも指導教員の個人的な関係に頼っているのかということを1つ聞きたいんですけども。

【大塚】先ほどちらっと申し上げましたけれども、本校にはグローバルリーダーシップ育成センターというセンター組織を作っておりますし、そこが中心に、先ほどのような国際的な研究機関との交流プログラムを開発したり、交流協定の締結といったことを進めているセクションです。ここの中メンバーがさまざまな活動を通じて、連携先の関係校スタッフと協議して、この国際インターンシップについても、そちらのそれぞれの国の状況に合った形で協力依頼を常にしております。

そうしますと、例えばそちらの連携先大学と共同研究とか、さまざまつながりのある、スタッフがつながりのある企業、こういったところと橋渡ししていただいて、つまり、そちらの教育機関を通じて、国際インターンシップ先を開発していく。ケースにもよるんですが、先ほど熊本でもちらっと話があったように、滞在先、先方の学生と私ども高専の学生をチー

ムで引き受けていただいて、海外での実務経験をしていただいたり、あと、もう一つシンガポールとか、あの辺りになりますと、認定企業がございますので、そういうったところには直接研修旅行とか、そういうったときに行きまして、学生たちはそこで交流プログラムをしておりますが、スタッフが直接、認定企業の方々の門をたたきまして、こういうプロジェクト、こういう国際インターンシップのプロジェクトを検討しているんですが、引き受けていただけませんか、という活動をして開拓をしているというのが現状でございます。

【平田委員】ありがとうございます。

【連川議長】よろしいですか。

【島川】今、遠隔で参加させているグローバルリーダーシップ育成センター副センター長の宇ノ木からコメントがありましたので、ちょっとご紹介いたします。

フランスについては、本校が直接、MOUを結んでいるわけではありませんが、鹿児島高専を通じて IUT、Institut Universitaire de Technologie、フランス語なのでちょっと読みにくいですけど、学生のインターンシップ受け入れ派遣のチャンスがあり、案内をしています。

ただ、現在のところ実績はまだありませんという紹介でした。

先ほどの大塚副校長の補足で、海外インターンシップは高専機構が取りまとめているインターンシップ先というのがございます。これは全国の高専向けで、機械ですか、化学とか、そういうプラントとか、そういうったところが多くあります。例えば、本校熊本キャンパスの電気系とか情報系の学生が海外インターンシップに行くとなると、なかなかマッチングするところが少のうございます。そういう意味でも、本校のセンターの方で独自にインターンシップ先を開拓しているという現状がございます。以上です。

【平田委員】ありがとうございます。それとあともう一個です。すいません。

【連川議長】どうぞ、どうぞ。

【平田委員】じゃ、簡単に。学生さんがインターンシップに行くときに、例えば国際奨学金のような海外に送り出すときの予算というのは、これは高専の方ではどの程度。予算というのはちゃんと作られているんでしょうか。

【島川】私が担当しているときの記憶ですと、日本人の学生が海外インターンシップに参加する場合でも、JASSO の学生支援機構の奨学金を受けて、行けるケースがございました。

あと、それ以外では、本校の奨学後援会組織から幾らかの支援をしていただいているということがございます。

【金森委員】「企業の皆さんへ2020年」というのを、今、見させていただいているんですけども、2、3 年前にも申し上げたのですが、やっぱり熊本県内の就職が少ないなということで、それに対して荒木校長から、「それは給料をもうちょっと上げれば」という話で。なかなか、思い出されたのですが、実際、工業連合会のメンバーにも、そういう情報は伝えてるんですね、見直されてるところもあります。

給料のことはともかくとして、例えば、われわれは、去年も今年も来年もですけど、熊本大学から入っていただいているんですけれど、それはやっぱり共同研究をやって、それで企

業を知っていたい来ていただいているという流れが結構多いです。高専さんの地元企業との共同研究というのが、数というか、質というか、それが増えていっているのか、というのを一つお聞きしたいのと、もう一つはやはり県外に出ていく学生を無理やり止める必要はないと、われわれはみんな思っています。逆に、大手企業なり中央で活躍して10年ぐらいたつと、やっぱり親の関係で戻らなきやならないとか、そういう人たちが出るんですね。そういう人たちがスムーズに熊本の企業に入れるような仕組みというのは、高専さんとしてはどういう考えを持っていらっしゃるのか、という2点をお伺いしたいと思います。

【小山】研究主事の小山ですけども、私の方から回答させていただきます。

県内に就職される方が増えているかというと、そういうことはないと思うんですけれども、うちの高専の方に、地域連合振興会というものがありまして、県内を中心に120社ぐらいですかね、会社さんが参画していただいている。工業連合会の会長のところの参画の会社が多いんですけども、そんなところで還流制度というのを作りまして、振興会のコーディネーターは河北さんだったんですけども、なりまして、そういうふうにUターンしていく学生を地域連合振興会または工業連合会、県内の企業さんに紹介するという制度を作りまして、今まで2件ぐらいちょっと成功した例を聞いております。

そういう形で、なるだけ地域の企業さんに紹介するような場を設けるとともに、都会にいる学生さん、戻ってきてみたいなという学生さんに、学校としてそういう部分の場を提供するというような取り組みをしておりますので、おそらく増えていくんじゃないかな、地域に就職したいという学生さんがこれから増えてくるのではないかなど。工業連合会さんとも一緒にその辺はやっていきたいな、というふうには考えております。そんな回答でよろしいでしょうか。

【金森委員】ありがとうございます。

【宮下委員】宮下です。何点かご意見ということになると思いますが、まず国際交流についていいますと、資料の15ページに熊本高専の国際交流の協定締結校というのがありますが、この中でヨーロッパの一番上の「大学間電子工学研究センター」というのが一番古いわけです。これ1996年に締結をされておられます。何で私がそんな古いことを知っているかというと、ちょうどその頃、私、熊日の植木支局におりまして、高専なんかも取材範囲にしていたんですけども、そういう話を聞いて記事にしました。

その後、電子工学科だと思うんですが、当時の高専としてはかなりレベルの高いクリーンルームをお作りになって、それもヨーロッパにありますけれども、かなり大きな記事として扱わせていただいたことがありました。当時の先生が、非常に広報に熱心な方で、2人でちょっと話し合いながら、「こんなことをすると大きくなりますよ」みたいなことを言って記事にした覚えがあります。大山英典先生、残念ながら大変若くして亡くなられたということで非常に残念ですけれども、そういう形で熊本高専はかなり早い時期から国際化について取り組みをされておられますので、是非、今後とも深めていただきたいと思います。

それから、それを当然、研究の世界で交流を深めることは、非常に大切だと思うん

ですけれども、新聞記者の方から言わせていただくと、是非、そういう国際交流であるとか、国際感覚ですね、そういうものを地域に是非、還元をするということを考えていただきたい。

合志市にしても、八代市にしても、子どもたち、たくさんいますので、そういう留学生であるとか国際交流の場ができるのであれば、それを是非、地域の小学生、中学生にこういう活動をやっていて、こういう国際的な場が、八代とか合志とかにあるんですよ、ということを言っていただくと、小学生、中学生も高専の存在というのを非常にやっぱり意識しますし、ひいてはそれが非常にいいサイクルで有意義な人材を出すことにつながりますし、先ほどのお話のように、仮に県外に就職をされたとしても地元で学んだという意識がある方々が、やっぱり地元意識を大切にするんじゃないかなと思いますので、是非、その辺を意識していただきたい。

それから、合志の副市長もいらっしゃいますけれども、そういう傲慢するわけじゃないんですけど、これは今の合志支局の支局長が是非、伝えてほしいという話なんですが、合志市にはマンガミュージアムというのがあります。うちの若い支局長が言うことには、アジアの若者たちに、日本の漫画というのはすごい魅力のあるコンテンツになっているそうです。ですので、まさに先ほど、どの高専を希望するかというときの一つの魅力的な場所として合志市というのは選ばれる可能性はあるんじゃないかなということで、地域の施設とセットで交流を深めるということも一つの在り方じゃないかということを聞きました。

最後ですけれども、そういう活動をなさるときは、是非、広報をしっかりとやっていただきたい。私も経験あるんですけど、「こぎゃんこつまで言わなんとですか」というのがあります、やっぱり後から聞くと、「あー、それ、記事にしたかったですね」という話は結構あるんですね。ですから、いろんなことをご面倒かもしれませんけれども、ご一報いただきますと、新聞社としては何事も広報させていただきたいと思っているそうですので、よろしくお願ひします。それから、もう一つは、ちょっと八代と熊本ですので、どっちの記事が分かれませんことが時々あるそうなので、その辺も対応を考えなければと思います。よろしくお願ひします。

【大塚】大塚でございます。貴重なご提言、ご意見いただきまして誠にありがとうございます。いくつかお答えといいますか、ちょっと状況をお話させていただきます。

国際感覚を高めるという意味で、地域に私どものいっていた経験というようなものを還元していく活動が期待されるという点でございますが、シンガポールのポリテクニック等との交流はもう10年以上長い取り組みになっておりますので、先方からも高専とポリテクレベルよりも、まだ若い生徒さんたちのつなぎができないか、という相談を受けることもあります。こういったところを必ず実を結ぶように、高専としても今いただいたような、よい産業を生むために地域に貢献できるような、またつなげていきたいとこのように考えました。是非、検討してみたいと思います。ありがとうございます。

また、マンガミュージアムにつきましても、設立の頃から合志市の皆さんからも情報をいただきいて、アニメーターの育成の塾であったとか、といった育成のところでもできる限り

のご協力をさせていただいておりますが、また違った角度からアジアの若者に魅力的なコンテンツなんだという視点で、こういうプログラムの中に是非、マンガミュージアムにお邪魔させていただいて、こういうところが熊本高専の近くにあるんだという、そういうアピールにもプログラムの中に盛り込めるようなことを工夫するように、ちょっと検討をさせていただきたいなと感じました。

実は、両副校長、両キャンパスにおけるんですが、実はこの両副校長が広報戦略室の室長も兼ねております。是非、肝に銘じて、広報活動をこれから鋭意取り組んでまいりたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。また、どちらのニュースなのかとか、どちらにお問い合わせいただければいいかということも心がけて、ご連絡させていただきたいと思います。貴重なご助言ありがとうございました。

【連川議長】どうぞ。

【徳永委員】中学校におけるものとして、高専にはかなり優秀な生徒たちが受験して、進学をしていきます。本当に、今、いろんなお話を聞いて、本当に世界的なシェアで将来活躍できる人材を育成しようということで取り組んでおられることがよく分かりました。

ただ、中学校の現場からいいますと、今、生徒を見ていてですね、大きな課題が2つあります。1つはコミュニケーション力です。なかなかコミュニケーションが苦手な子どもたちが増えているように思います。これからのグローバルな人材育成というのは、本当に大事なことだなと。もう一つは、創造的知性といいますか、5年後、10年後どうなってるか分からぬ、この世の中。やっぱり新しい問題に対して、自分たちで何とか工夫して、その問題を解決していく力。そういう力をどうやってつけたらいいのか。その取り組みの1つとして、授業改善の一環として、今回、全ての中学校にタブレットが入って、そういうICTを活用してお互いの考えを共有したりというような授業が進んでいきます。

そういう観点からいようと、やはり国際交流といいますか、この機会に一番のあれは授業ですよね、日頃の授業の中でいろんな考え方、できればいろんな国の人たちの考えをぶつけながら交流して、中で課題を解決していく、そういう力を日頃の授業で培っていく。しかし、なかなか日本語の壁がありますので、その辺は難しいかもしれません、これが一番の本流だと思います。2点目はイベントですね。高専ならではのいろんなイベント、仕掛けができますので、そういう共同の作業を通して、海外の人たちとの交流を深めて、そういう経験を積んでいくというのはとても大事なことだと思います。

もう一つは、シェアハウス型になってますので、日常的な生活での交流ですね。寝食をともにすると一遍に何か親しみが湧くし、そういうのが非常に貴重な機会だなと思って、これを生かしていけば、本当にとてもいい実践になるんじゃないかなと思いながら聞きました。

ただ、冒頭に言いましたように、なかなかコミュニケーション力が苦手な生徒たちが多いですので、そういう生徒たちがこういう経験を本当にみんなが積んで、そういうふうに世界に羽ばたいていく。そして、また熊本に帰ってくる。そういうことができたらいいなと、非

常に夢のある今日はお話を聞かせていただきありがとうございました。以上です。

【連川議長】まだまだご意見があるかと思いますけれども、お手元に UX Project という資料がございます。そちらについて、産業振興局の、少し、ご説明をさせていただきたいということでしたので、これは小牧委員の方からよろしくお願ひします。

【小牧委員】今日はありがとうございます。紹介いただきました産業振興局の小牧でございます。先ほどから、今日は国際寮の話、国際交流の話がございましたけれども、私も先ほどから平田委員をはじめ、連川先生等の意見もありましたように、ここは最終的にはいかにグローバルな視野を持った活躍できる技術者を育成するかということに尽きるという話で、ほかの高専の方でも取り組みをされると思いますので、ぜひ魅力あるプログラムをやって、この取り組みが活発になることによって目的が達成すると、そういったところを期待したいと思っております。

今日は時間をいただきまして、お手元にあります UX Project について、少し私の方でお話をさせていただきたいと思います。UX Project、このゆえんについては、後ほどご説明させていただきたいと思いますが、これは私どもの蒲島知事がよく申し上げておりますが、熊本地震からの創造的復興、まさに空港が大きく変わろうとしております。熊本空港コンセッション方式になって、より魅力ある熊本づくりを進めているところでございますが、そういう変革する空港周辺地域に、熊本の強みを生かした知的産業集積の拠点の旗を掲げて、さらなるチャレンジしていく。まさに知事の言葉を「熊本がシリコンバレーを実現する」ということを今後、具現化していきたいという考え方のプロジェクトとして立ち上げたものでございます。これは 10 月 21 日に知事の定例記者会見の中で発表させていただいたものでございます。

1 枚めくっていただきてもらってよろしいでしょうか。変革する空港周辺地域における新産業創出ということで、熊本の強みを生かしつつ、先端技術とアフターコロナにおける価値観の変化をしっかりと踏まえた、「地域資源を活用した、新産業創出が繰り返される、くまもと」を目指していきます、ということが目指す内容でございます。

熊本の強みというのはどういうものかというと、当然、自動車産業、半導体産業。これは当然両輪で強みでございますが、それに合わせまして、医療、介護、健康、食、ビューティ、スマート農業などのライフサイエンス産業のこの辺を重ね合わせました地の集積の拠点をコンセプトとして取り組んでいきたい。取り組みの方向性としましては、ここに書いてあります 3 つの視点、「研究機関の集積や人材育成」「技術交流の拠点となるイノベーションハブの設立」「先端技術の導入・活用」というものを取り組みの方向性としているものでございます。

次を開けてもらってよろしいでしょうか。取り組みの 1 に書いてありますようなものにつきましては、大学などの学術機関や企業の研究開発部門、公的研究機関やこれを下支えする金融機関の集積などを図っていきたいと考えております。取り組みの 2 につきましては、実証実験の場となる共同研究エリアの設置や、人や技術をつなげるコーディネーターの設

置などを検討しています。また、取り組みの3については、先端通信技術の5Gや6G、また仮想現実に代表されるVRとかAR、また自動運転の導入を検討していきたいと。例えば、空港から拠点までを自動運転で走らせるような、少しワクワクするような取り組みも考えていきたいというものです。

最後に、ゆえんでございますが、4枚目を開けていただきますと、まず「U」につきましては、身近な人、家族、県民、国民、全世界の人々をあなたと表現した英語の「You」ということ、また人と人、人と技術、人と情報をいわゆる結びつけるという表現した「結う」、またさらに、熊本の熊を表す「熊(ゆう)」を意味付けた形で「U」としております。「X」につきましては、人と人、人と技術、人と情報をクロスさせる、またかけ合わせるを表現しているところでございます。また加えて、「X」には未知という意味もありますので、これから起こるイノベーションを未知なる部分への期待と感動の意味を込めて「X」ということで整理させていただいたところでございます。

このUX Projectにつきましては、今回の9月議会で調査費がついたところでございますので、これから具体的な基本調査を行いまして、来年度から基本設計、実施設計、またハードだけではなくて、できるものソフトについてはですね、来年度からこの取り組みを進めていきたいと思っています。ここに書いていますように、クロス、まさに人と人をかけ合わせる、またいろんな意味で結び付けるという意味で、このUX Projectについては、企業や県民の皆さん、また今日お集まりの皆さん方からも、是非、いろんな知恵を借りまして、そして参画していただいて、まさにアイデアをクロスさせながらこのプロジェクトに取り組んでいきたいと思います。

これからスタートするということでございますので、せっかくの今日、機会でございましたので、ご紹介させていただきましたところでございます。どうぞよろしくお願いします。ありがとうございました。

【連川議長】ありがとうございました。ワクワクするようなプロジェクト、是非、これを実現することとか期待しています。

それでは、そろそろ会議終了の予定時間になりましたので、ここで令和2年熊本高等専門学校運営諮問会議を終了させていただきたいと思います。つたない進行役でございましたけれども、ご協力どうもありがとうございました。

【司会】委員の皆さん、長時間の会議大変お疲れさまでした。ここで、荒木校長よりお礼の言葉を申し上げます。

【校長】今日は委員の皆さん、ありがとうございました。それから、連川先生、議長をありがとうございました。大変貴重なご意見等々をいただきましてありがとうございます。

国際寮というのは、1つのテーマであるんですけども、これからやっぱりいろんなところに広がりがあります。われわれも単に留学生を受け入れる、それから国際交流の場を持てるというところだけではなくて、いろんな広がりの中で考えていくたいと思っております。

私も、国際寮に関しては、日々、委員の皆さんからもありましたけれども、やっぱり

日常的な国際交流、それから日常的な異文化理解の場、キャンパスの中でできるんだというのが一番の特長かと思っております。これも島川からの紹介にもありましたけれども、一応、留学生はいるのはいるんです。ですけども、やはり今では数が少ないので、なかなかそういうのもやっぱりうまくいかない。やっぱりある程度数が増えて、敷居値を超えたらいっと、学校中に広がっていく。その敷居値はどれぐらいなのかというのはまだ分かりませんけれども、手探りしながら、人数のこともありますけども、いろんなプログラムの展開の中でその敷居値を低くして、全国的な広がりにしたいと思っております。

国際協働プロジェクトなんかは、上級生が今、主に活動をやっております。海外に出かけて行って、国際ワークショップやってみたいと、ハッカソンとかアイデアソンとかをやったり、あるいは熊本のここでもやったこともあります。彼らは1週間ぐらいなんですけど、ちゃんと国際混成チームでものを作つて最後に発表するんですよ。それは私は素晴らしい、それは高専ならではと思っております。私が前にいた九大では、なかなか1週間でものを作つてできません。それは、高専ならでは。でも、これは上級生ですから、スキルがある。

だから、スキルがあれば、理工系のことですからもの作りという共通の土台に立てば、英語はあんまりできなくても、物を実際に見せたり、回路図を書いたり、試作してみたり、それでできる。それで一緒にやれるということが分かれば、じゃ、これに英語がプラスすればもっともっとよくなるだろうというので、上級生はそういうチャンスを持っているんですけど、まだまだ下級生はですね、1年生、2年生は入ったばかり。でも、彼らにも、先ほど申し上げた日常的な国際交流、異文化交流の場に親しんでいただきて、スムーズにシームレスに上級生の活動の方へ、うまく結び付くようなことができたらいいな、ということを考えておる次第でございます。

そのためには、いろんなプログラムを用意しないといけません。受け入れのプログラム、多種多様なプログラム。でも、それは向こう側から来る人のためのプログラムで、ひょっとしたらちゃんとこれで履修証明書を出して、向こうの単位になるようなこともしなきゃいけない。

じゃ、こっちはどうなんだ。うちはこっちもですね、それに参加した学生は、ちゃんとカリキュラムの中できちんと評価されて、単位に結び付いて、卒業要件に結び付くような、そういうふうにして日本人の学生も皆全員参加するということをこれから考えていきたいと思っております。

それから、また地域の皆さんにも、大変お世話になるかと思っております。特に企業の方々には、会社の見学も含めてインターンシップの受け入れ等々、いろんなことをお願いします。また、その中から、さっきも先生方おっしゃってました、地域の国際化につながるようなそういう活動につながればと思っております。この国際交流とか産学関連とかもそうですが、すぐにそれが実を結ぶものではありません。私もいくつかやりましたけれど、やっぱり最初のうちはなんだかですけど、5年、10年、15年、20年ずっと継続してやることが必要だと思っておりますので、まさに今始まろうというところで、皆さま方からのご理

解とご支援、ご協力をこれからもよろしくお願ひ申し上げます。

今日は、本当に短い時間ではございましたけれども、われわれにとって重要なご指摘、ご意見をいただきました。どうもありがとうございました。

【司会】これをもちまして、本日の日程を終了いたします。本日の会議の議事要旨につきましては、後日、委員の皆さまへ案をお送りし、ご確認していただく予定としておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

本日は誠にありがとうございました。お気をつけてお帰りください。

## 運営諮詢会議における提言事項

### ◆ 「国際寮の新設と今後の運用について」に関する提言事項

提言 1-1	高専生に留学生との交流によって国際的視野を持たせることの他、本質的に留学生と接することで他に学べることができるような高専生主体、高専生ファーストの考えを持った取り組みを希望する。
--------	---

#### ◇意見等抜粋

- 日本の高専生も海外の留学生と交流することで国際的な視野を持つのも当然いいと思うが、それ以外にもっと本質的に海外の留学生と接することで学べることが他にもあると思う。是非、日本の学生主体、日本の学生ファーストの考え方をお願いしたい。  
【平田委員】

提言 1-2	国際寮の入寮に関しては、特定の高専生に限定せずに限られた資源の中で、より多くの高専生が日本にいながら海外経験ができるようなプログラムの構築を希望する。
--------	---

#### ◇意見等抜粋

- そもそも国際寮の建設というのは、日本人学生のグローバル化、というのが一番の趣旨だと思う。箱物だけ造っても意味がないので、それをどのように活用し、運用していくかが、更に重要なのではないか。また、入寮できる学生数も高専生全員に対してかなり少ないので、特定の学生だけではなく、限られた資源の中で、どのように多くの学生が日本にいながら海外経験ができるか、そのようなプログラムの構築が最も重要な課題ではないかと思う。【連川議長（委員）】

## 国際寮の新設と今後の運用について

熊本高等専門学校 熊本キャンパス

寮務主事

島川 学

2020年10月29日

国際寮 新設（2021年3月末 竣工予定）



 国立熊本高専  
National Institute of Technology, Kumamoto College

## 国際寮の概要

### 目的

国際寮は、国際的な視野を持つ実践的で創造性のある技術者が育成できるよう、留学生と日本人学生が混住を通じて国際交流が行える施設で、効率的に全国的に配置する必要から、統一したスタイルの施設となっている。

### 概要

- ・ 鉄筋コンクリート造 3階建
- ・ 1510m<sup>2</sup>
- ・ 68居室



## シェアハウス的な共同生活



熊本日日新聞(朝刊) 2020/08/09

## 熊本高専(合志市)が国際寮

# シェアハウス会話は英語



シェアハウス型「国際寮」の交流スペースのイメージ(熊本高専提供)



シェアハウス型「国際寮」の外観イメージ(熊本高専提供)

## 日本人在学生も受け入れ 来更新設

熊本高専は、留学生の受け入れ拡大で、クローバーな複数を持つ施設である校舎の「音波を活用したシェアハウス型の「国際寮」」を合志市須屋の熊本キャンパスに新設する。明らかにした。運用開始は2021年7月の予定。

日本人の留学生と外国人留学生が共同生活を通じて語学力やコミュニケーション能力を高め、世界に向けての意識を育てる狙い。国立高等専門学校機構(東京、大阪、名古屋、福岡、仙台)など、日本立高専のうち熊本を含む17高専に設置する。

情報通信技術(ICT)の活用を希望する生徒も増加傾向に伴う施設不足を解消するため、これまで一貫教育制度を導入して、2014年秋から、国際寮を設置。これまでの経験を踏まえ、モニタリングやヒヤウ、ダイのうみ園で、国際寮を運営する。一方で、同キャンパス学生寮の短期間学生の宿泊は10人、年間の受け入れ数も約20人にとどまっていた。同キャンパスは定期入居、同キャ

バスの敷地内に隣接し、

鉄筋コンクリート造階建

延べ床面積は1,100平方メートル。

個室や共有部が交流スペース

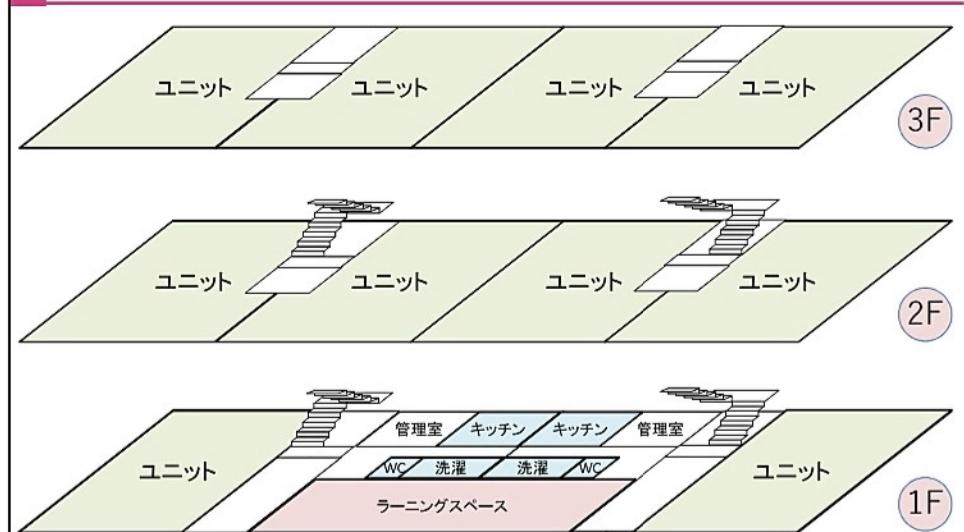
を含むシェアハウス型の計10

ユニットを構成。イタリア教の

区画を設け、各ユニットは

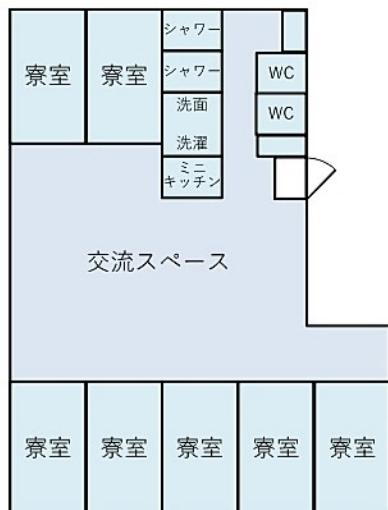
戸建住宅風に設計され、

## 国際寮の構成



国立熊本高専  
National Institute of Technology, Kumamoto College

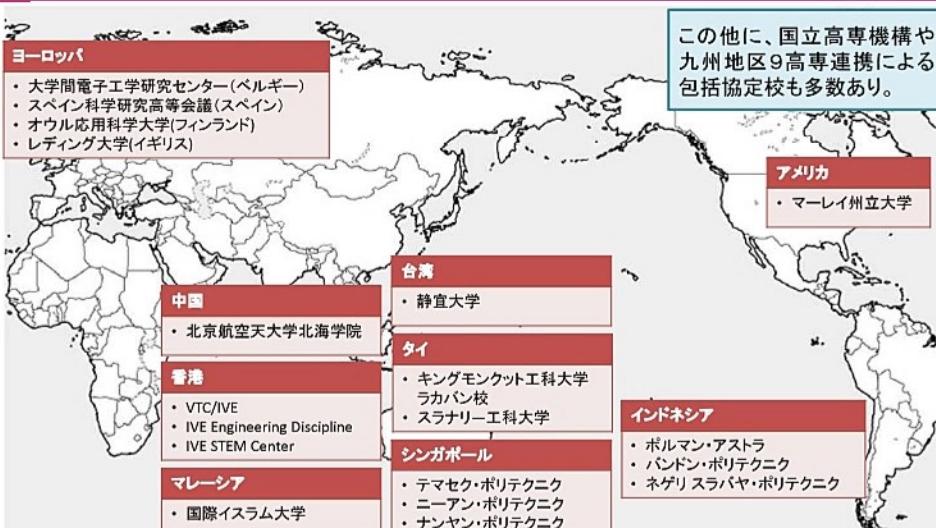
## 国際寮の構成（ユニット）



- 各ユニット 7名  
(1階のユニットは 6名)
- 全部で10ユニット 68室
- 交流スペースで気楽に過ごす



## 熊本高専の国際交流（協定締結校）



## 熊本高専の国際交流（受け入れ）

### ■ 留学生（長期）

- ・ 高専本科3年次に入学する。3年間勉強して卒業する。
- ・ 入学前に日本語を勉強してくるので日本語が話せる。

### ■ 短期留学生（2～6ヶ月程度）

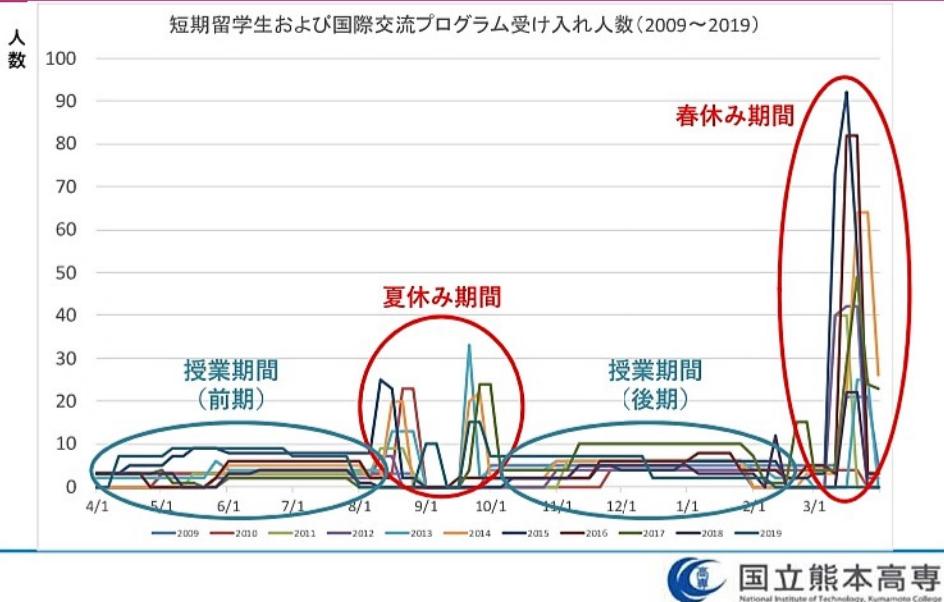
- ・ 担当教員の指導の下、研究室でプロジェクトを実施
- ・ 日本語は話せない。研究室内で交流

### ■ 国際交流プログラム参加学生（数日～2週間程度）

- ・ 長期休暇期間（夏休み・春休み）に実施するイベント
- ・ 文化交流や技術的ワークショップなど



## 熊本高専の国際交流（受け入れ）



## 留学生（長期）

- 每年両キャンパスにそれぞれ2~4名程度ずつ
- 寮に滞在

国名	2020	2019	2018	2017	2016
マレーシア	3	2	2	2	
モンゴル	1	3	1	2	2
カンボジア				1	1
タイ				2	
メキシコ			1		
ラオス			1		
バングラディシュ		1			
インド					1
セネガル					1
計	4	6	5	7	5



国立熊本高専  
National Institute of Technology, Kumamoto College

## 短期留学生（2～6ヶ月程度）

- 授業期間中。毎年20名前後。
- 寮に滞在（部屋数制限により同時期に10名程度以内）



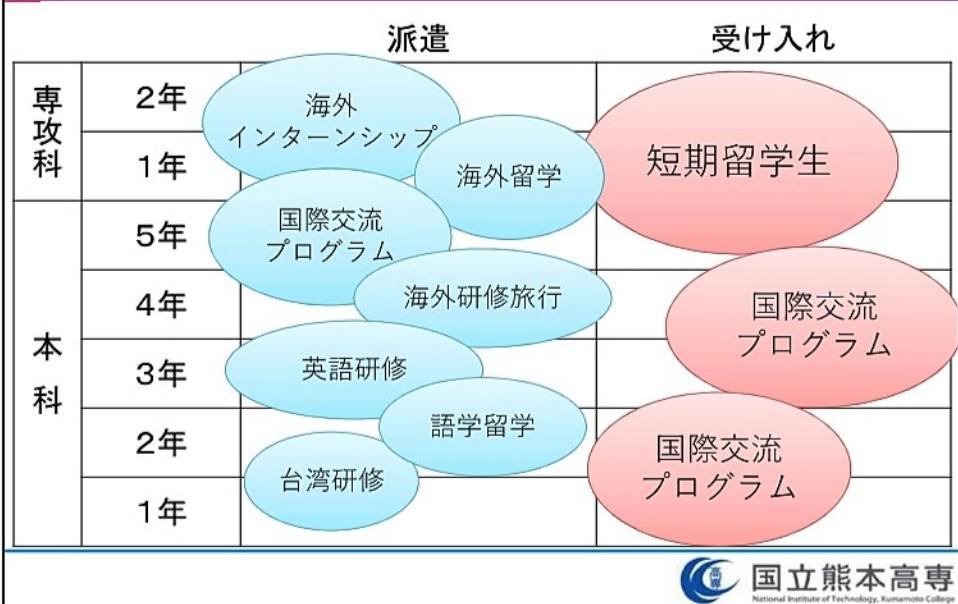
National Institute of Technology, Kumamoto College

## 国際交流プログラム（数日～2週間程度）

- 10名～30名
- 近隣のホテルに滞在



## グローバル教育



## お伺いしたい事項

- 国際寮の活用
  - 国際寮を活用できるアイデア
  - 委員の皆様が取り組まれている国際交流 など
- 地元の自治体・企業・教育機関等との連携した活動
  - 地域交流
  - 留学生を含めた共同研究, インターンシップ
  - アイデアソン共同開催
  - 技術体験, 見学会, 就職説明会 など



令和 2 年度熊本高等専門学校運営諮詢会議報告書

令和 3 年 6 月 発行

熊本高等専門学校 総務課  
〒861-1102 熊本県合志市須屋 2659-2  
TEL:096-242-3783 FAX:096-242-5503  
URL:<http://www.kumamoto-nct.ac.jp/>